

幼 兒 教 育

第 三 十 九 卷 二 月 號 第 二 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內
日 本 幼 稚 園 協 會

生徒募集

本科生四十名

研究生若干名

願書受付三月二十日迄規則書は參錢切手

封入の上申込まれよ。

玉成保姆養成所

所長 ソファアヤ・アラベラ・アルウ井ン

東京市杉並區西高井戸一丁目一三三
省線 西荻窪下車直南約五丁

創立以來廿四年

大正五年東京市麴町區に創立。

昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、

附近に森あり、野あり、川ありて四時自

然の恩恵を受け、本校の特色とする自然

觀察、博物採集、圖畫寫生、自然物應用

の手工等材料豊富なり。

保姆生徒募集

一、募集人員 五十名

一、出願期限 二月一日ヨリ受付

規則及入學案内ハ三錢切手ヲ同封シテ請求セラル、カ又ハ山手線

目白驛前目白幼稚園ニ就キ承合セラレタシ

淀橋區下落合三丁目一、三七八

東京目白保姆學校

電話落合長崎二五五九番

平安女學院保育科

修業年限二箇年・保姆及母として

の學習、實習、研究

(入學案内要三錢切手)

保姆・小學教員無試驗檢定資格有

第一學年 參拾名募集

出願受付 自一月八日至四月四日

京都市上京區下立賣通烏丸西入

平安女學院

なほ英文科・家政科・家庭科及豫科・平安幼稚園・平安高等女學校あり

生徒募集

募集人員 七拾名

出願期限

自二月一日
至三月末日

○入學手續ヲ簡易ニ改メタリ

○入學試験ヲ要セズ 提出書類ニヨリ詮衡ノ上直チニ許可書ヲ送付ス

○無試験檢定ニヨリ保姆免許狀ヲ受クル特典アリ

○寄宿舎ノ設備アリ

規則書入學案内ハ參錢切手封入申込マルベシ

東京市品川區大井原町五二〇八(省線大井町驛ヨリ城南バ
スニテ原停留場下車二分)

東京昭和保姆養成所

所 長 土 川 五 郎

顧問兼講師 倉 橋 惣 三
東京女子高等師範教授

生徒募集

募集人員 百名

願書締切 三月末日

◇無試験檢定ニヨリ保姆免許狀ヲ受クル特典アリ

◇寄宿舍ノ設備アリ

東京市杉並區高圓寺三ノ二九八

東京保姆專修學校

一、定員 四十名 一、保母資格を得

一、締切 三月二十日 一、寮舎の設備あり

佛 教 保 育 保 母 養 成 所

協會

東京市中野區宮前四八 電話中野五八七〇番

一、全國佛教幼稚園聯合の保母養成機關なり

一、帝都名利寶仙寺境内に同寺經營の中野高等女學校並感應幼稚園
と共に併設せられ環境の清澄と模範的優秀設備は本所の誇りで
ある

一、交通は省線新宿驛より五分 寶仙寺前下車

詳細は學則請求を乞ふ

生徒募集

本科生四十名

研究生若干名

願書受付三月二十日迄規則書は參錢切手

封入の上申込まれよ。

玉成保姆養成所

所長 ソファアヤ・アラベラ・アルウ井ン

東京市杉並區西高井戸一丁目一三三
省線 西荻窪下車直南約五丁

創立以來廿四年

大正五年東京市麴町區に創立。

昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、

附近に森あり、野あり、川ありて四時自

然の恩恵を受け、本校の特色とする自然

觀察、博物採集、圖畫寫生、自然物應用

の手工等材料豊富なり。

保姆生徒募集

一、募集人員 五十名

一、出願期限 二月一日ヨリ受付

規則及入學案内ハ三錢切手ヲ同封シテ請求セラル、カ又ハ山手線

目白驛前目白幼稚園ニ就キ承合セラレタシ

淀橋區下落合三丁目一、三八八

東京目白保姆學校

電話落合長崎二五五九番

平安女學院保育科

修業年限二箇年・保姆及母として

の學習、實習、研究

(入學案内要三錢切手)

保姆・小學教員無試驗檢定資格有

第一學年 參拾名募集

出願受付 自一月八日至四月四日

京都市上京區下立賣通烏丸西入

平安女學院

なほ英文科・家政科・家庭科及豫科・平安幼稚園・平安高等女學校あり

生徒募集

募集人員 七拾名

出願期限

自二月一日
至三月末日

○入學手續ヲ簡易ニ改メタリ

○入學試験ヲ要セズ 提出書類ニヨリ詮衡ノ上直チニ許可書ヲ送付ス

○無試験檢定ニヨリ保姆免許狀ヲ受クル特典アリ

○寄宿舎ノ設備アリ

規則書入學案内ハ參錢切手封入申込マルベシ

東京市品川區大井原町五二〇八(省線大井町驛ヨリ城南バスニテ原停留場下車二分)

東京昭和保姆養成所

所 長 土 川 五 郎

顧問兼講師 倉 橋 惣 三
東京女子高等師範教授

生徒募集

募集人員 百名

願書締切 三月末日

◇無試験檢定ニヨリ保姆免許狀ヲ受クル特典アリ

◇寄宿舍ノ設備アリ

東京市杉並區高圓寺三ノ二九八

東京保姆專修學校

一、定員 四十名 一、保母資格を得

一、締切 三月二十日 一、寮舎の設備あり

佛 教 保 育 保 母 養 成 所

協會

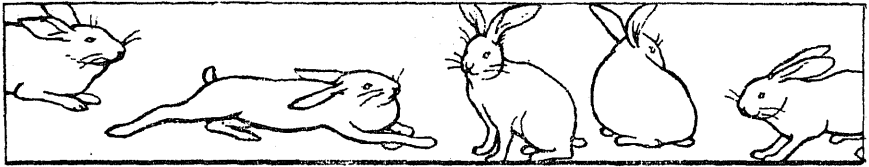
東京市中野區宮前四八 電話中野五八七〇番

一、全國佛教幼稚園聯合の保母養成機關なり

一、帝都名利寶仙寺境内に同寺經營の中野高等女學校並感應幼稚園
と共に併設せられ環境の清澄と模範的優秀設備は本所の誇りで
ある

一、交通は省線新宿驛より五分 寶仙寺前下車

詳細は學則請求を乞ふ



第 二 號 幼 兒 教 育 の 幼 兒 卷 九 十 三 第

— (次 目) —

口 繪	卷頭(二月の朝ひる).....	倉橋 惣三(一)
子供を理解せんとする母の努力.....	石川 謙(二)	
子供の虚言.....	倉澤 剛(四)	
雛人形.....	及川 ふみ(七)	
幼稚園に於ける齒科衛生施設.....	山田 伸子(九)	
日本の子供は日本の母の手で.....	竹村 一(三)	
肖像模倣に於ける幼児の個性に注意の研究.....	森 たよ(九)	
劇あそびの脚本.....	山村 きよ(二九)	
滿洲だより.....	田中美 技(三五)	
フレール賞入選童話		
かくれんぼ.....	N 子(毛)	
南京城.....	直野 カツ(四)	
ハイディ——ヨハンナスピリ原作.....	津田 芳雄譯(四)	

靜寬院宮幼時の御姿に擬せ「鏡様」人形の頒布



「女子ノ身ヲ以テ國難ヲ匡濟スルノ用ニ供スルコトヲ得バ水火ノ中ニ投ズルモ辭セズ」ニ悲壯なる決意を以て、徳川十四代將軍家茂公に御降嫁遊ばされたる和宮様、後の靜寬院宮様こそは、洵に我が殉國犧牲の象徴にして、又その貞烈淑正の令徳は萬代婦道の典型として國民齊しく仰ぎ奉らねばならぬことであります。

今同本會に於ては宮様御婦徳宣揚の一助として「鏡様」人形を廣く同好の士に頒布することにいたしました。此の御人形の原型は宮様の側近者を出せる正六位法有字家所藏にかゝる山緒深き御人形にして、人形製作の大家山田徳兵衛氏が謹製したるものであります。尙此の御人形の原型は國定教科書小學國語讀本卷十二にも登載され宮様の尊容を偲び奉る史料の確實なるものはこれ以外にはないのであります。又本人形の添書中には宮様の御眞蹟の對鏡の御歌を奉載し、題字は御宗家徳川公夫人泰子の直筆にかゝるものであります。冀くば江湖の諸賢の御贊同により廣く一般家庭・幼稚園・小學校・女學校等に奉安されんことをおすゝめ致します。

「鏡様」人形

御身長 鬢先まで 曲尺六寸五分
黒塗臺及び桐箱付

金拾八圓也

送料 東京市内 十二錢 樺太・臺灣 六十二錢
内地一般 二十一錢 朝鮮・滿洲國
但し代金引替の場合 十八錢増

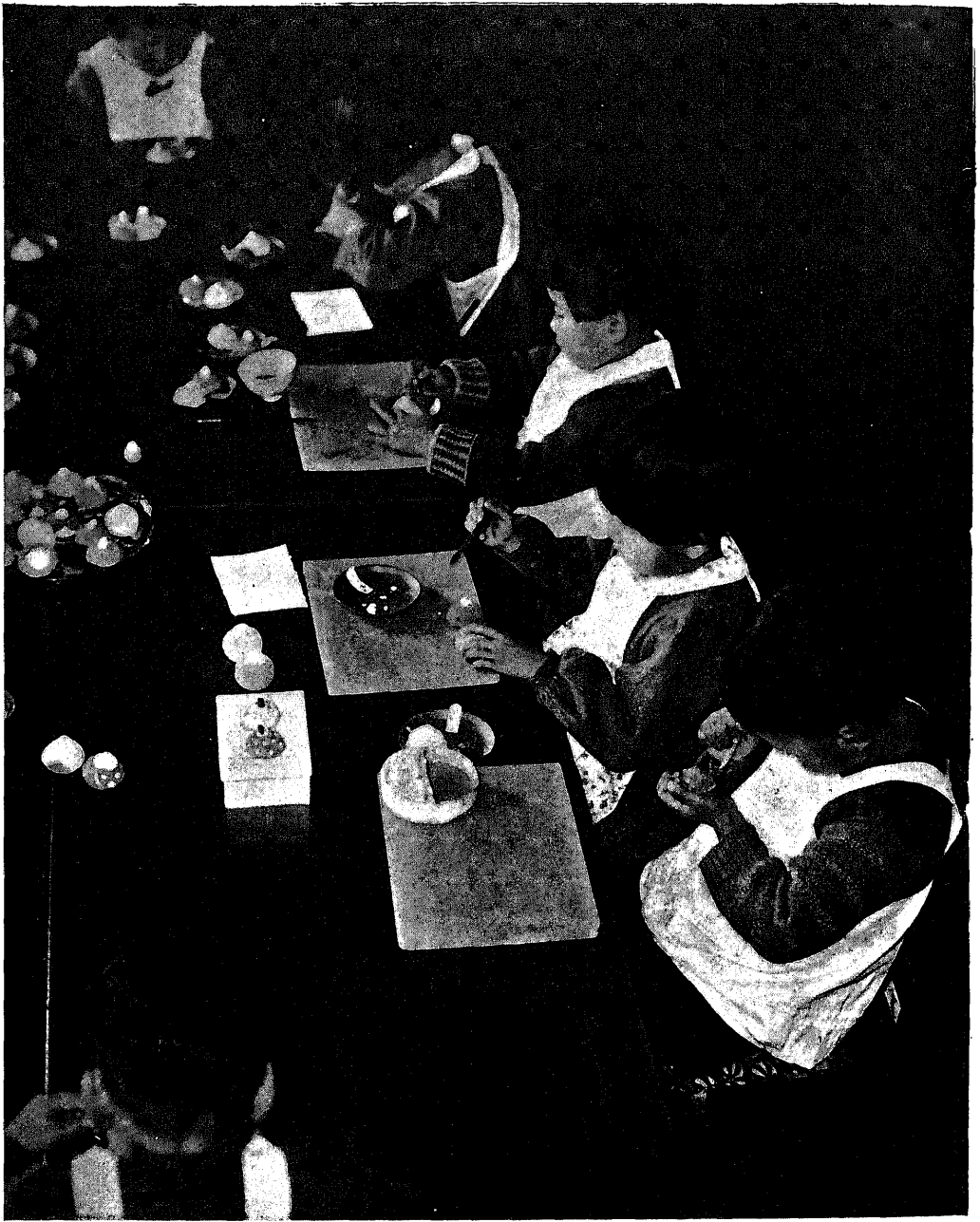
頒布先

取次所

東京市芝區芝公園増上寺中
財團 法人 靜寬院宮奉讚會
東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

日本幼稚園協會

電話 大塚三一四二番
振替口座東京一七二六六番



幼 児 の 教 育

昭和十四年二月

二月の朝ひる

霜の道を凍えて来る子等を待ち受けて、けさのストープはさつきから赤く燃えてゐるけれども、さて、あんまり暖め過ぎてはミ氣にかゝる。外套をぬがせ、手袋をこつて、さあ／＼朝の體操にミドアーをあげかけて、けふもためらふのは此のしぐれ空である。閉ぢ籠めてゐてはならぬミ氣を勵ましてはみるが、またしても子さものの咳が耳についてならぬ。おひる前からのうす日をたよりに、午後こそは外遊びミ子さも等も約束してゐたが、午後さいふミ風の出る此の幾日をさうしやうもない。思ひきつて一隊を引きつれ、お口をふさいで、お鼻でいきをしてミ、云ひつゞけ／＼一廻り馳け足をさせて見た後で、何子さん、何子ちゃん、苦しくはなくつてミ、言つてはならぬ弱い言葉がつい口に出る。

.....

もさより鍛練を方針ミはするが、こんなこゝではミは強く思ふが、實際にはまごふ實際家の心こそ、貴いこゝはないまでも、ありのまゝの二月の朝ひるである。

子供を理解せんとする母の努力

東京女子高等師範學校教授

石

川

謙

たゞ單に愛するばかりではいけない、子供の身體の構造や心のはたらきやの原則を實情を充分に理解していなければならぬ。こいふことは幼い子供を持つ母親への要求として、世の中の識者がよく繰返す言葉である。それに違ひはあるまい、そうあつて欲しいものだ。私も思つてゐる。

然し子供の心と身體とを理解するこいふ意味が單に生理學的に或ひは心理學的に把握する、こいふ事だけの意味にとゞまるならば、それは「事實の追跡」であつて、決して子供養育の最後のものでもなく、最大のねうちあるものもあるまい。一つの手段、一つの方法を提供して呉れる手掛り足懸りとしてのみ、それだけかのねうちを持ちうるにすぎぬであらう。

子供を知るこいふ事と、養育するこいふ事は同じではない。聯らなつた事ではあらうが、つらなり方には種々ある。若しも知つたが故に常にそれに隨はなければならぬ、こいふのであつてみれば、其處には養育と、教育とが、いふた様な、大人の意志の積極的な働きかけはみこめられな

い事になる。知つたがゆゑに手も足も出なくなる。賢さが、臆病さを誘つて何ももしない事になるのは此のゆゑであらう。養育するとか、教育するとかいふ事は、親たる人の本能的な、盲目的な、自働的なはたらきの内に、多分に根ざしてゐるものである。いひかへて見るに、親自らもしばく自覺して居ない所の母性愛・父性愛の愛情の變形である。愛せずにはいられぬ心、養育せずにはおられぬ心である。それ故に愛情がしばく盲目的であつて具案的でない様に、母親の養育・教育はこもすれば理性からはなれて、理性とは相容れない方向に落ち入りやすい。それはさう考へても養護學の上からも教育學の上からも、承認しえない愚しき悲劇である、判断しなければならぬ。

然しそれだからこいつて愛情的なものの本能的なものをぬぐひ、さる事は、それが不可能であるのみならず、しようとしてはならぬ企てである。さう考へて來るに、教育的のものの中に缺くとも今日の教育學からいつて非教育的なものが、宿命的に抱きこまれてゐるこみなければならぬ。合理

的に合理的に努力してゐるにも拘らず、到底整理しきれない非合理的なものが含まれてゐる事は、矛盾といへば矛盾であるが、我等の人生の壯嚴なる事實として、これをみごめなければなるまい。整理しようとしても、組織立てようとしても、破れて、綻びて、閃き出てくる非合理的なものを、一概に排斥してしまふ事は、安全にして且安價な科學主義である。人生の事實は科學主義によつて清算し得るものでない。隨つて教育の事實も又割切れない非合理的な事實が絶えず残されてゐる。残された非合理的な面の教育的表現として、しばし無智といはれ無謀といはれる、教育の方法がわき出てくるのである。私は斷じて、殊更にそれを尊重しようとする程のあまのじやくではない。然しそうしたものを、一概に排斥し去る、甘い科學主義者にもなれない。親達が自己の全人生をかけて、その持てる愛情の故に合理的なものを求めると同時に、同じ愛情の故に非合理的なもの、養育・教育の仕事の全面に暴露してゐる事實を、精練されない愚しさとして排斥し嘲笑する氣持にはなれない。むしろ所謂愚しさの中にこそ、本當の母親らしさが尊く閃いてゐる事實を眺めては、涙ぐましい感じに打たれて、感謝したいささへ思ふ場合がある。

世の中の幼い子供の母親たちに、聰明な科學者として子供に臨んでもらふよりは、むしろ科學によつて枉げられた

り、抑へつけられたり、傷つけられたりする事のない、初心うぶの氣持としての愛情が飾り氣なく子供の上にふり注される愚かしい瞬間の母親をこそ母親の純なる姿として、眺めたいと思ふ。百パーセント科學者になりきつた賢い母親からは、恐らく純真な温い子供の魂は生育しないであらう。況んや出来合の心理學や教育學から安價に仕入れた知識や法則を、無暗に有難がる錯覺から編みだされた死骸ばかりの方法論で、一體如何なる子供が育てあげ得るものであらうか。子供を愛すればこそ科學を尊ぶ、子供を愛すればこそ科學からそれて行くと言つたやうな絶えざる矛盾の中にこそ、子供の本當の成長が望まれるであらう。尠くも魂の素直なそして温かな成長が、科學的に科學的に努力しながら、しかも絶えず非科學的な盲目的な愛情の迸りによつて、いつもいつも破れ傷つく母親の魂に努力の中にこそ成長を遂げうるものであらう。

世の母親たちが幼児の健かにしてすなほな生育を望むならば、母親自體が子供に對して自然に持つてゐる純真さ、熱烈な愛情さを、そしてその故に表はれ勝な破綻さを見掛け美しい科學の前に、恥ぢてはならない。決して科學的なものを排斥したり軽く見たりしようとする意味に於いては、はないが……。

子供の虚言

——眞實への教育(二)——

東京女子高等師範學校助教

倉澤剛

五

子供の虚言の問題として、第二に注目すべきものは「思ひちがひ」、即ち「記憶の錯誤」Erinnerungsstäuschungenである。子供は自分の體驗について、好んでこれを語らうとする。しかし、子供の記憶は頗る不正確であるから、その語るまゝには、屢々眞實でないものが見られる。けれども、子供の誤つた言ひ立てを、すべて虚言と考へるのは誤解である。子供自身において、今言つたことは本當のことではないといふ意識があり、これによつて他人を欺かうといふ意圖があるとき、始めてこれを虚言と呼ぶべきである。かういふ基準に立つて考へると、親達がいろ／＼と心配してゐる子供の誤つた言ひ立ては、大部分が決して虚言と叫ばはるべきものでないことが知られる。何故なら、子供には、言ひ立ての不眞實といふ意識もなく、誤つたことを殊更に言はうとする意圖もなく、いはゆる「虚言の徴表」

を具へてゐないのが通例だからである。先に述べた「幻想による虚言」もこれであり、こゝに述べようとする「思ひちがひ」もまたこれである。

さて、「思ひちがひ」、乃至「記憶ちがひ」による誤つた言ひ立ては、多くはどんな理由から生ずるのであらうか。殊に幼児において、過去の體驗を再生するに當つて、随分不正確なことを口にするが、これは果してどんな理由に基づくのであらうか。その第一は、恐らくは幼児における「時間の意識の缺陷」であらう。生後一年間は、子供は實際に自分の體驗したことを、過去の何時のこゝであるか、全然定めることが出来ない。最初の誕生日を迎へるまでの一年間は、子供には殆んど何等の時間意識もないといはれてゐる。彼等はあることを、つい昨日體驗したこゝなのか、或は數週間前に體驗したこゝなのか、その區別が出来ないものである。それ故、子供の記憶のなかに、秩序と明瞭さが

表はれて来るのは、既に精神的にある程度の成熟を遂げて来たここの一つの證左に見なければならぬ。かやうな正確な時間意識から、自然に數多の誤つた言ひ立てが生ずるのである。

けれども、子供の記憶の錯誤は、時間の意識の缺陷にもさづくだけではない。同時にまた子供の「注意力の缺陷」にもさづく場合が多い。子供にあつては、多くの體驗は頗る不完全に印象せられるに過ぎないものである。大多數の子供は、凡そ十二歳の頃までは、多かれ少かれこの種の表面的な見方に止まるものゝやうである。餘程しやんごした子供でも、この種の輕さ・淋さ・不たしかさは、免れがたいものゝやうである。既に子供の心意がかくも不たしかな状態にある以上、この中に取入れられた印象が、何等明瞭な形をとり得ないのは當然のこゝである。つまり、ある一部の體驗さ、それに應ずる記憶さが、偏して強調されるやうになるのも、當然のこゝである。しかし、概していふならば、大抵の印象さといふものは、本來ありふれた種類のもののであるから、特に子供の心に深い印銘を與へるこゝいふやうなこゝさはない。従つて、何等悪い意圖があるわけではなくして、もうすつこ大きくなつた子供にすら、しばしく誤つた言表が見られるのである。

六

かやうな記憶ちがひによる誤つた言ひ立ての例は、學校生活の間にも無數にある。よく子供は教科書さか、筆入さか、ノートさか、ナイフさか、鉛筆さかを失つたさか、或は誰かに盗まれたさか、現に先刻手にさつて使つたのだのにさか、今朝お母さんが眼の前で入れて下さつたのにさか、まこさしやかに言ひ立てる。時には隣席の子供たちまで、今朝實際に見たこゝがあるなさ、まこさしやかに言ひ添へたりする。さころが、それらは、カバンに入れたつもりで、實は家においてあつたさか、決してこれを虚言さかある。この種の誤つた言ひ立ては、決してこれを虚言さかふこゝは出来ない。それは、せいふく、「自分自身に對する不忠實」さか、いふに止まり、結局は體驗の再生が不たしかさか、いふに過ぎないからであつて、この種の不たしかさは、子供の世界だけでなく、大人の世界にも無數に見られるものである。

コピウスによれば、プレスラウの一教師は、彼の受持の子供について、示唆に富んだ一つの實驗を試みてゐる。或る日の第一時間目に、彼は教卓の上に小刀さか、チョークさか、ペンさかを置いて授業をすまし、子供が教室を立去つて後、三つの事物を引出しの中に片付け、さて第二時間目の初に、「前の時間、先生の机の上には何があつたか、覚えてゐる人はそれを言つて御覽なさい。」と問うた。約五十人のクラス

の中、たゞ二人、しかも智能率の低い二人が、僅かに小刀があつたことに注意したゞけであつて、一人として三つの事物のあつたことに注意の及んだものはなかつた。この教師はかやうな事實に一驚を喫したが、更に暗示の力を試みようといふ考から、實はこれ／＼の三つの事物を置いてあつたのだと告げ、その翌日になつて、第一時間目に、今度は机上に何も置かず、全く空にしておいて、さて第二時間の初に、前日と同様の質問を發したところ、二六％の子供は小刀があつたに答へ、五七％の子供はチョークがあつたに答へ、更に六三％の子供はペンがあつたに答へた。尤も％の合計が百を超えてゐるのは、恐らくチョークとペンと兩方あつたやうに答へた子供があつたゞめであらう。この實驗によつて示唆されることは、第一に、子供の觀察が如何に不正確であるかといふこと、第二に、觀察したことを再生する場合に如何に不明瞭であるかといふこと、そして第三に、子供の言ひ立てといふものは、外からの暗示によつて、如何に容易に影響されるかといふことの三つである。

七

このことから、まづ注目すべきものは、「根掘り葉掘り問ひたゞすことの危険」である。世には子供に向つて、見たこと、聞いたこと、したことを、あゝか、かうか尋ね廻す人がある。例へば、「そのお母さんはきれいに着飾つてゐ

ましたか。」「その子は赤い外套を着てましたか、青い外套を着てましたか。」「先生はそれから何もおつしやいましたか。」「あなたはそれに何もお答へしましたか。」「こいふやうに、單純な無頓着な子供に根掘り葉掘り尋ね廻す人がある。このやうな發問は、子供を全然の虚構に誘はないまでも、少くも子供から不正確な答を引出す危険が少くない。たゞに無意識的な「想起の錯誤」に導くのみでなく、進んでは意識的な不眞實に導く虞が少くない。ウィリアム・シュテルンも、この種の愚かな發問の系列を示して反省を促し、人が如何に子供の言ひ立てに信をおきがたいものであるかを警告してゐる。私達は決して必要以上の問を子供の上にあびせてはならない。なるべく平靜の状態を保たしめよきは、こゝでもまた保育の大切な原理に掲げられる。

同様のことは、多くの大人にも屢々見ることが出来る。

「えゝ、私はさう思ひます。」「さか、「僕はかうだつたに信するよ。」「さか、いはゆる半信半疑の言ひ方は、我々の世界にもいくらでもある。たゞ、いつも眞實を語らうと良心的につゞめる人、不明確なことを、不明確さ知りつゝも、まことしやかに言ひ立てる人によつて、著しい差違がある。この點は後更に考へて見る。さもなく、子供の記憶は頗る不確實であるから、これに基づいて、不確實な言ひ立

雛人形

及川ふみ

きびしかつた寒さも峠を越してそろそろ雛の節句の準備にさりかゝる季節きたつてきた。時節柄材料に費用をあまりかけないでしかも一寸味のある雛人形をさいふのでころみに作つて見た雛人形について紹介して見る事にする。

新聞粘土の雛人形

新聞紙を幼児一人につき一枚位の割合で、毎日少しづつむしらせる。新聞をやぶく事は容易であつて、誰にでもすぐに澤山ちぎれる様に思はれるけれども、實際に見て見るに少しの時間ではなかく澤山の新聞はむしれない。それでこの新聞むしりも幼児にまつては一つのお仕事にもなる。新聞一枚を八つ折りか、成は十六折位の大きさを一度にむしる分量が適當かもしれない。出来るだけ小さく同じ位の大きさにむしらせる。むしつた新聞紙はバケツに入れて水を入れておく。毎日棒で搗くことも一つのお仕事である。氣候のあたゝかい時には新聞紙も早くくちやぐちやになるけれども、寒い時には容易にほぐれないから金盥に入れてよく煮るさよい。一週間か十日位根氣よく幼児と先生

とで棒で搗くに餘程新聞紙もほぐされて来る。

柔くほぐされた新聞紙を握つて水氣を出来るだけ取り去る。印刷の黒い汁もいくらか取りのぞかれて色が白くなる。一方ふのり十錢位のもの新聞紙三十枚位につきをよく煮出した汁と前の新聞だんごをよくかき交せる。こままで作ればあまは普通の粘土と取扱ひ方は同じである。

お雛様の形はどんな形でもよい。幼児の作れる形でよいが形の出来ないものゝために保姆さんは幼児に容易に出来る形の雛人形を豫め作つておいて見せるのも一つの方法である。

形は極めて簡単なものがよい。だるまの形のものもよいであらうし富士形のものもよいであらうし、饅頭形のものもよい。いづれにしても頭の部分だけ少しくぎりがつけばよい。小さいお茶碗や、盃などを型にしてつくるのも手軽な方法である。頭の部分だけに銀杏なぎの木の實を入れてつくるのも一方法とも考へて造つてみた。

さて形が出来ると數日間日光によくあて、乾す。心まで

充分に乾すには相當の時日が必要であつて向をかへたり
ひつくりかへしたりしてよく乾す。大ききによつてもちが
ふのであるが小さいのであると大抵一週間も干せばよい。

彩色

はじめはきの色に塗るにしても全部胡粉で白くする。顔
は白にのこしておいて装束の部分にそれ／＼の彩色をする
があまり細かくいろ／＼の色にするのはむづかしいから顔
の外は全部装束の色を一色にぬりつぶして後に胡粉で簡單
に模様をかくこよい。

胡粉でぬりつぶした顔には墨で眼鼻をかゝせる。

雑臺

雑臺も新しい紙を使ふ事をやめて古端書でつくる事に
する。端書を二枚縦横に重ねて四角に糊をつけて二枚重ね
る。この時全部に糊をつけるは紙が縮むおそれがあるから
四角だけに糊をつけておく。四角にはみ出してゐる部分だ
け折りかへして臺の高さをする。

臺にはクレヨンで色をつけてもよいが古い切手をはりま
せてつくつてみる。

古封筒の切手の貼つてある部分を幼児にきらせて、水に
したして暫くおく、適當の時にはがさせて干しておく。切
手に三錢四錢さいろ／＼の色があるから臺の周圍に適當に
貼らせる。

保育實習科生徒募集

(官報抜萃)

本年四月入學せしむべき保育實習科生徒を募集す
其要項左の如し

昭和十四年一月

東京女子高等師範學校

一、募集人員 凡二十四名

二、出願期限 二月一日より同二十八日まで

三、學 資 學資は總て自費とし 授業料年額金五
十五圓を徵集す

四、選抜試験

入學志願者に對して

學科試験身體檢
査人物考査を行ふ

1、學科試験

國語(解釋作文)、理科(植物)、圖畫
(自在畫)、音樂(唱歌)

2、期日 本年三月十三日、十四日の二日間

3、場所 東京女子高等師範學校

(附記)

出願の手續其他詳細の事項は之を記載
せる印刷物を用意せるに付其送附を希
望する者は參錢郵券を貼附し宛名を記
載せる封筒を添へ本校に請求すべし

幼稚園に於ける齒科衛生施設

日本大學幼稚園長 山田 伸子

今回の大會に於きまして『幼稚園に於ける齒科衛生施設』に就ての宿題を御報告申し上げますことは、誠に光榮の至りに存じます。たゞ淺學菲才に加ふるに場所の不馴れも、時間の關係から十分意を盡し得ないこと、存じますが、九年間實施してまゐりました事に就て、幾分なりとも御參考に供するところが出來ますならば幸ひも存じ、事實そのまゝの經過を述べさせて頂きます。

便宜上、一動機、二設備、三訓練、四實施、五經過、六希望の六項に分けました。

一、動機

私は保育界に身を投じてから二十五、六年になります。が、日常如何に幼稚園に衛生施設の必要であるかを痛感させられてゐました。それは申すまでもなく、誠に危険な幼児期の者ばかりの集りで御座いますから、一人傳染性の病氣が始まれば、忽ち蔓延いたします。或る年などは百日咳に、全員の半分も罹患したことがあり、父兄におかれては極度の不安から幼稚園をさへ、うきんするほごで御座いま

した。かうした困難なる事實と共に、もう一つ食事のたびによく齒痛を訴へられることでした。私はかゝるいろいろの實際上の經驗から、幼稚園にはさうしても特別に衛生施設が必要であること、就中齒科衛生施設が此の時代に缺くべからざることを痛感いたしましたので御座います。それと同時に保育者が醫者であつたらきんなに理想かと思ひました。しかしそれは考へさせられたのみで、その當時の幼稚園にては何等施す術もありませんでしたので、食後の齒痛の場合には自分が小さい時、ばあやがよくしてくれたいやうに鹽水にて含嗽なごさせながら、さうかしてこれ等に對する良き設備な方法を得たいものだと思へました。そして多くの御母様方に眞實の幼稚園を捧げたいと思ひましたが、さてそれが實現には何等の良き方法も與へられず、日々の仕事に追はれ、いつしか歳月は流れてゆきますうちに恰度今から十年前、即ち昭和二年の十一月に只今の日本大學幼稚園が設立されました、幸ひ私が責任を持つ様になりましたので、始めて此の時こそ日大附屬の齒科學校に

かけつけ、その當時よりの只今の科長佐藤先生に御目にかゝり、かねての宿望を申げましたころ、手を拍つてよいところに氣がついたとおつしやつて下さつて、その當時の兒童科主任水間先生を御派遣下され、あれやこれやを、設備に取りかゝりましたのは昭和三年の三月頃でありました。

二、設備

扱つて漸くにしてその機運に達しましたものゝ、設備萬端は中々容易のものでありませんでしたが、本校の右先生方や、縁川先生（その當時のライオン衛生部長でした）なごの御盡力で治療に必要な一通りの設備が出来ました。診療室は玄關の應接室と一緒にしてあります。これは餘談ですが、つひ三四年前には是非とも電氣エンヂンにしたいと思ひましたが經費がありませんので、齒科の器械屋に交渉して月賦にして貰ひ、やつと備へるこゝが出来ました。それから齒みがきを教へるために、洗口場を作りましたが、これもその當時は水道がありませんでしたので、モーターで洗口場へ送入されるやうにして、齒ブラシやウガヒコップかけなごは、全く素人の手製で、たゞ齒ブラシがよく乾燥されるやうな方法に作りしました。全くお粗末なものです。寫眞の通りかうした設備は漸くにして出来ましたものゝ、こゝに第一の難問題に當りましたこゝは、幼兒に對する實施

方法でありました。

三、訓練

その當時のお母様方には「さうせ抜けかはる齒ですから、新らしくなつてから大切にしませう」なごとおつしやる方が大分にありまして、従つて子供たちにも齒さへば痛い、お醫者様さへば恐い、もつともお母様方の中には、泣くにお醫者様の許へ連れてゆくよ、先生にいひつけるよ、なごとおつしやる方が多いのですから誠に困つたこゝです。乳齒の重要性を認識させるためには随分苦心いたし、これが訓練には實に努力を要しました。

先づ子供を馴らせるべく、第一にお醫者さ診療臺への親しみを計りました。診療臺は幼稚園のエレベーター名づけ、その運轉士は水間先生、助手は園長先生さいふこゝにして、殆んど一二ヶ月位は、一人宛子供を診療臺にのせ、「今日は三越のエレベーターです、三階に御用はありませんか」さか、「帽子は何階ですよ」さか、私共は汗を拭きく上下させて、容易に診療臺に親しみ乗れるやうにしました。そして一方保育時間にはお話にお遊戯に、お仕事、心を用ひて居りますうちに、漸次に全部の診査が出来ましたのです。そこでその結果を通知書になし、或は水間先生の運轉士に園長先生の助手なご、漫畫のパンフレットなご作つたり、父兄會を開いて講演や活動寫真なご種々八方に

心を碎きました。

四、實施

幸ひにして割合早く父兄方の理解も得られ、子供は殆んご在園全部を治療するやうになりました。従つてはみがき訓練も追々實施され、お辨當のあごには必ず洗口場へ行くやうになりました。中にはいたづらの子供もあつてチューブをコップの中にしぼつて水を入れてかきまわし、牛乳だなぎ、遊んでゐる子もありますが、とにかく全部が磨くやうになりました。殊に夜の歯みがきについては、父兄に嚴重に御話して極力獎勵いたし、歯みがき日誌は毎月保姆の手でいろ／＼な繪を工夫され、謄寫版で刷つて興味を深めるために幼児に色を塗らせるやうにしました。これは昭和三年五月以來、未だ一月も休みません。中には毎月ぎょうしても持つてこない子供もありますが、何回でも根氣よく獎勵して、實に今日まで續けてゐるので御座います。入園の際には必ず父兄に齒科診療に就て諒解を求めると共に、齒刷牙子を學用品として持たせて居ります。お蔭で齒の幼稚園だなぎ、評判されました。

五、經過

次に診療狀況の經過について申上げてみたいと思ひますが、その結果は誠に反比例な不思議な現象を示してゐます。ここは甚だ残念であります。これには大きな原因がありま

す。昭和三、四、五、六、七年度位までは、殆んごその九〇％は治療をいたしましたところが、段々に減少するやうになりました。只今では在園の約半分強位で御座います。その大きな一ツの原因は、折角乳齒の大切なことを説いても、全部に園にて治療をすゝめることの出来ない状態になりましたことです。經費だなぎも始めは無料であつたし、中途から父兄の好意によつて實費を頂いて誠に容易に實施されてゐましたが、八、九年頃になつて、全くその理想を破られましたので御座います。齒科醫師會の規則さか齒科醫師法だなぎを全く少しも知らない私は、たゞ／＼子供本位に年々四月に入る新しい子供の父兄に對して、極力乳齒の大切なることを説きまた抵抗力の弱い時代をさうしたら無事に過すであらうか、それには齒科の方ばかりでなく、百日咳やデフテリアだなぎの豫防注射を實行させるやら、これも始めは痛いことです。それから心配しましたが、父兄の深い理解のさきに、これも容易に毎年實行されてゐますが、全くかうした氣持から、その上にもよりよき實行さ、よりよき父兄の理解を望むまゝに、これらは訓練として私一人の考へにて、いろ／＼の方法を取つたもので御座いますが、これ等が大きな原因の一つさになりました。以來最近では治療費も實費以上になりましたし、治療時期も豫防週間を設けて希望者のみさになりましたのです。故に一學期間に三週間

や四週間の期間にては到底充分なことが出来なくなつたので御座います。勿論實費以上を申しましたも、これで収支が償ふわけはありませんが、従來の無料より有料となり、現在は齒科醫師會の標準料金を徴収してゐるのでございます。

六、希望

御話は前に戻りますが、實施上最も大切なことは、よき齒科醫を得ることであらうと思ひますが、私の子供を思ふ親心の満足こそ申しませうか、さうしても得られない事で御座います。勿論私は素人で御座いますから處置方法について申すではありませんが、何ぞ申しませうか、素人の言葉で後始末がつかないのです。これは實施方法の大きな缺陷で、幼稚園經營上の困難といふ大問題になると思ひます。

病氣は都合のよい時ばかり出てこない。治療週間でないから一寸痛みを待つて貰ひたい、都合が悪いから病氣を明日に……、年中無休に少くも一週三日位の治療日を設けたい。感染根管などの家庭にて行き届かざるものなきは、一年も二年も幼稚園にゐるうちに、これらの治療が出来その他の治療も行つてゆきたい。豫防治療程度のものでなく徹底的にしたい。實に第二の國民保健のため大きな國家問題であると思ひます。

しかし扱つかうなりません、次ぎに來る問題は經費で御座います。私は幼稚園に入れば、齒みがきが全部に實施され

てゐるやうに、全部が診療を受ける。齒のみでなしに體のことも、私共では百日咳の豫防注射、デフテリアの注射、検便なきもしてゐますが、すべて幼児の保健に對して全部出来るやうな方法を講じたい、かうした費用を保育料のうちも含めることを當然としてゆきたい、またかうした費用を出し得ない状態にある幼稚園では當局で何かよい御考を願ひたいことを切望して止まないのであります。私は未熟乍ら止むに止まれぬ氣持より幼稚園に於ける齒科衛生施設に多大の關心を持つ一人であり、今後更には幼児期の保健衛生には一層献身したいと思つて居ります故、何分もよろしく御後援を御願ひ申上げる次第であります。終りにかうした發表の機會を御與へ下さいましたことを感謝致します。

(六頁より續く)

てをする場合が極めて多い。これを普通には「記憶的虚言」Erinnerungsliüge と呼んでゐるが、この種の虚構も誤つた言ひ立てにいふに過ぎず、未だ本來の虚言といふことは出来ない。私達は子供に對して、明瞭に事物を見よ、正確に事態を知れ、そして自己に忠實たれと念じ、この方向に子供を導くべきで、これを虚言として責むべきでないことは言ふまでもない。

日本のこどもは日本の母の手で

— 教育は「賣藥」に非ずといふ論文をよんで —

大阪帝國大學醫學部講師 醫學博士

竹 村

一

HYGIEIA の Sept. 1938 には特に Education について書かれてある。之は九月が入學始期であるから親達へ注意を與へたことであらう。

その内「Education Isn't "Patent Medicine"」の題で Richard Fehheimer といふ人が面白い事を書いてあつた。

『教育は「賣藥」ではない』と云つてゐるリチャード・フェッチハイマー氏はどういふ人か、私は一向に知らぬ。

然しこの一文を読んで、親といふ自分も、こどもの教育をおまかせしてある幼稚園の保母さん、小學校、中學校、大學の先生といふその兩方の立場について大に考へさせられた。

日本のこどもをより心身の健康な日本人に育成するこゝが日本のあらゆる教育層に於ける健康教育の目標であること主張してゐる私の提案に對して矢張り「日本人であること

を認識——人格が與へられ——樹立さるゝのは日本の母親であるといふこと、更に最も幼い時代をあづかる保母さん達により多く、より強くこの認識が必要なのではなからうかといふ感じがした。

教育は何にでもきく a Patent medicine ではない、又教育は「Mental health and growth require as Careful diagnosis and hygiene us does physical health.」といふことを忘れてはならない。

私は幼稚園に「母親學校」を附設するこゝの必要性を屢々説いた。殊に一昨年、基督教幼稚園五十年記念講習會の席上では記念事業として開設せられんことを私は要望した。

日本のこどもは日本のお母さんの手で、日本人としての基礎がきづかれなければならないのである、それには母親の再教育が如何に必要なことであるだらうか。

倉橋先生がこゝ數年來殊に力を盡してゐられるこのことは亦この母親の再教育運動ではありますまいか。

日本のすべての保姆さん達がこの事變下の第二年度に於て、長期建設の叫ばれてゐる今日、人的資源が其重要性を叫ばれてゐる今日、將來の心身ともに健康な日本人をつくる爲に心を新にして奮起して欲しいと思ふ。

それは、幼いこども達の爲にも、
其幼いこども達の母親の爲にも、

拙い譯文で所々間違つてゐるかも知れぬが、お許しを願つて一通り讀んで考へてみてゐただけは又參考になることもあらんかと思つて、譯出してゐた。

海の彼方の民族は異つてゐる、國情も異つてゐる、風土も異つてゐる、然しこどもを教育する親と教師との心と心との一脈には又同じ脈うつ處もあらんかと思ふ。

要は御一讀下さつて、日本のこどもの爲に、日本の母親の爲に、保姆諸姉が何かを御考へ下さつたら誠に幸である。



「……………母親が先生の肩の上へ責任を多く轉嫁することが出来れば出来るだけ母親は自分の暇が増えるだらう。けれども何處かには、つきりした限界がなければならぬ。そして兩親の仕事の内その限界によつて決定せられた

部分だけを學校は扱ふことが出来るのである。最も立派な先生であつてもそれだけの時間と、それだけの精力と、それだけの能力しかもたないのである。両親は自分の子供がたゞそれだけをうけることを期待出来るのみである。

勿論丁度「賣藥」のやうに教育はあらゆる悪癖に對する治療であるとして廣告されて來た。「あなたの娘さんは平均がされて居ませんか。花嫁學校へやりなさい。」「軍隊の學校へやつてあなたの息子さんをたゞきなほしてもらいなさい。」「魅力と個性とを發達させなさい——魅力發達法の通信講座をまりなさい。」然しながら、教育に於ける賣藥流の考へ方は製藥の方に於けると同じやうに確かに馬鹿げた話である。精神的健康と發達は肉體的健康と同じやうな診察と衛生法とを要求する。そんな公立小學校の先生にでも自分の生徒の個人的必要を一一分析する時間があるだらう。それにもかゝらず「うちのデニイをもつこよい子にして下さい。」「ご頼まれなかつた先生があるだらうか。

ほんの近頃或るかなり成功した實業家が威猛高になつて次のやうに語り出して晚餐會の一座の人々を驚かした。「大學なんて詐欺行爲だ……泥棒だ！何さかして金を取り返さずにやならん！」彼はテーブルをたゞいた。彼の顔は赤かつた。そして彼が非常な大男で又非常に怒つて居たものだから他の客達は明に君子は危きに近づかざるを以てよしみ

なすこ考へた。

彼はつゞけて云つた。「四千ドル……子供を大學へやるのにこれだけかゝつた！ だのに一體それから何を待たせよ云ふのだ？ 彼の父親でもそれから一體何を待たせよ云ふのだ？ 我々が得るものは利己主義な自惚れの強い親の手から何を取るこゝが出来るか云ふこゝばかり考へて居る青二才もだ。」

そこに居合せた誰かトナブキンで口をふきながら「この父にしてこの子ありだ。」と云つた。他の一人が勇敢にも聲高に大學から人格の陶冶まで期待するこゝは出来ない云ふこゝを仄めかした。

「それぢや一體大學から何を期待するこゝが出来るんだ？ 諸君お聞き下さい、私は工場の原料を買ふ時にはもう金を拂ふ前からそれだけの利益があるか云ふこゝを知つて居る。機械を買ふ時には一セントも拂はない前から一つ／＼の機械がそれだけの仕事をさするかも知つて居る。けれども私が自分の子供に教育を買つてやる時にはそれがさうなるか誰にも分らん。さうだ、それがさうなるか私は今分つた……私は欺されて居たのだ。」

そして勿論この父親の云ふこゝは正しかつた。大學の教育は彼が期待したものを彼の息子に考へなかつた。彼は明かに大學は忙しい四年間の内に十七年もかゝつて形成され

た個性を造りなほすこゝが出来ると思ひこんで居たのである。十七年の間息子は力強い父の模範にしたがつて来たのである。そんなにまで曲つてしまつた枝はどんな立派な教授でも眞直にするこゝは殆んど出来ない——たゞさうやつてみるこゝが彼等の職務であつたとしても、そして教授の仕事は彼の學生の人格を造りなほすこゝでは勿論ないのである。彼の職務(そして一般教育の目的)は智的活動に於て學生の心を訓練するこゝなのである。若しなほ職務ありとするならばそれはきつて學生をも教師をも両親をも面喰はせるにちがひない。大學は思素を教へるこゝは期待されてもいゝ、だが決して子供達の精神的悪幣に對する賣藥だとして両親に提供されるこゝは出来ない。

シカゴ大學總長ロバート・M・ハッチンス博士はこの點について強い態度を取つて居られる。

親たちや納税者達が學校に期待するこゝの出来ない今一つのこゝはもゞ／＼家庭と教會と市に屬する多くの仕事を専攻するこゝである。シカゴに性的犯罪が多くなる學校で性のこゝを教へよと云ふ要求が起る、する局長はそれにも注意しやうと市民に保證する。又別の所に於ては自動車事故が増す學校で安全運轉法を教へよと要求する、そして安全運轉法の講座が設けられる。かくの如くあらゆるもの事に對する責任を學校に轉嫁するに於ては學校の課

程の中から教育を撤廢するこゝになるだけである。

性、安全運轉法及び食卓作法は何處かよそで教へられねばならぬ、けれども學校は時間に制限がありその持つて居る時間の全部を學生の心を發達するのに必要とするのである。その心が適當に發達した男女の世代が來れば安全運轉運動の必要はなくなるだらう。けれども學校が家庭や教會の地位を占めるやうになれば最早や學校ではなくなるこゝは確である。

學校が期待されるこゝの出来ないなほ一つの事柄は間接的以外の方法によつて人格を造り上げるこゝである。若し學校が子供達を精出して働くやうに又彼等の心を以て精出して働くやうに訓練するならば彼等はそれを人格の確立云はずに人格を確立して居るのである。けれども若し兩親が自分の子供が成長して盗人になつてもらひたくないならば彼等は學校に頼るべきではない。若し子供が家庭で學ぶ習慣が彼を窃盜の方に向けるならば、若し彼の親たちが彼が若い盗人と交るのを許すならば、彼は賢い盗人になつて學校を卒へるかも知れない。學校は彼に讀み書きを教へるこゝは出来る、しかしそれは彼を家庭、映畫、新聞、ラヂオ、及び隣りの男の子のやうな力強い能因から引き離すこゝは出来ないのである。かくて大學教育のみならず小學校育も亦學生の性格に大變革を來すには無力であるやうに思

はれるであらう。學校で過される時間は一日の活動のほんのちよつした一部分に過ぎないのである。教室内の仕事は一般に映畫やラヂオの番組に比べるさ凡そ無味乾燥なるものである。それがさうして同じやうに大きな影響を子供の心に及ぼすこゝが出来やう。教師は親が考へるこゝの出来る親切に較べるさ子供に必要で直に望ましいやうなものはほんの少ししか考へるこゝが出来ない。

たさび兩者が相等しい人格の力を持つて居るさしてもさうして教師の影響が親のそれ位大きくあるこゝが出来やう。

その上不斷に子供の心に激突して居る無數の他の影響があるのである——町さ時勢さの感情的雰圍氣、人生さ同じやうに現實的な書物、近くに壓倒的に聳えて居る山。一目にはほんのつまらないもの、例へば壞れた玩具、迷ひ犬、親切な他人の言葉、秋の木の葉の燃える匂ひ、——これらすべてのこゝが相合して測り知られざる力さなる所の小さな跡を残すのである。

パートランド・ラッセルのやうな教育の大熱心家でも學校教育にはその限界があるこゝを認めるであらう。「教育さ善き生活」さ題する彼の書物に於てラッセルは次のやうに書いて居る。

我々は怠惰で卑法で冷酷で間抜けである。我々にかうし

た悪い性質を興へるものは教育であるが教育は我々に反對の徳を興へねばならぬ。教育こそは新しき世界への鍵である。

然しながら同じ書物の先の方でラッセルは次のやうに書き加へて居る。

人格の確立……は主にもつこ若い時代に行はれるべきである。若し正しくなされるならばそれは六歳迄に殆んど完成する筈である……。若し六歳までの子供が適當に取扱はれて来たならば學校當局者は純粹に智的な發達に重きを置き、さうしてなほ望ましき人格の發達はこれに頼るやうにすれば一番いゝ。私は確信して居る。

然し六歳以前に於てすらも學校は家庭や運動場よりも弱い影響しか及ぼさない。私の隣人が四歳の困つた女の子を持つて居た。この子は自分の望むものは何でも興へられた。彼女は我儘で自己中心主義で、全世界は彼女だけの所有物だ。明かに信じて居た。彼女は他の子供さうまくつき合ふことが出来ず、自分と同じ年の遊び友達は一人もなかつた。こゝは明かである。彼女は彼女の母が同時に遊び仲間であり下女であることを要求した。

或る日ふこ考へ違ひをした時に私はその子は幼稚園に行つたらいゝだらう。母親に提案して娘を近くの幼稚園へやつたのである。

後で私が聞いた所による。こその子は學校の課業に調和しやう。こは全然しなかつたさうである。教師は母親がやつたやうに彼女に侍いてくれなかつたので彼女は彼等が頼む。こは何もしやう。こしなかつた。彼女は他の子供さ親しくしやう。こさへしなかつたのである。彼女が學校で過した朝の三時間の間彼女は普通自分だけで居り、他の子供から引き取る。この出来るすべての玩具を以て遊ばねばきかなかつた。彼女はその幼稚園へ利己的なねぢけた子供さして行つた。學期の終りにも彼女はまだ利己的なねぢけた子供であつた。

然しその時には彼女の母親は自分の娘の明かな紀律の缺乏についての申分を持つて居た。私は全くむき出しに幼稚園が彼女の可愛い子供の氣質をこわしてしまつた。こ告げられた。私は、そして多分他の多くの人々も、私が彼女を瞞して彼女の子供を悪い處にやらせ、そこでその子は悪い習慣を教へられた。こ告げられた。私は私の馬鹿な顔を他人の事件につき出すべきではない。こ告げられた。この最後の陳述に對しては私は今滿腔の贊意を表する。けれども私は幼稚園が一日二三時間でその一日の残りの部分に於ける母親の影響を破壊することが出来ないから。こいふだけで幼稚園が悪い處だ。こ云ふ。こには同意しない。

人格も慈善も同じく先づ我家に始まる。それは茶匙で日

に與へる方がよろしい。

々注ぐ位の教育で教へこむことの出来るものではない。教育はそれ自身の重大な職務を持つて居る——それは思索を教へるに云ふことである。若しその教への副産物が立派な人格であるならば我々は過分の價値を受けたに云ふ點に於て幸運であつたのである。然し自分の子供が立派な人格を持つて居るに云ふことを確信したい親達は自らそれを子供

誰が先づ「我は日本人だ」といふ思索を體驗せをうえつけ
るであらうか、それは家庭の母——日本の母ではあるまい
か。

(終)

鏡さまお人形

倉 橋 惣 三

靜寛院奉賛會から頒布、本會に於て取次ぎの鏡様人形は、その貴い御ゆいしよに於て、是非とも、廣く全國の幼稚園、小學校、及び各家庭へ奉安をおすゝめしたいことであります。(本誌廣告欄)

しかも、私は、その嚴かな心を暫く別にさせていたゞいて、假りにたゞ一つの、まことに可愛らしい京の姫人形にして、くつろいだ心もちで、皆さまにおすゝめいたしたのであります。なんこいふ、ふくよかなお顔、なごやかなおぐし、わけても、あきけない御立姿、ゆるやかに美しいお召もの。これこそ、眞に日本固有の童女美の具現に申すほかありません。これこそ、日本の女の子の座右の寶にしたいいものであります。

殊に、たゞへば、三月の雛棚に、日本の内裏さまに並べ飾つて眞に似合はしい日本人形を得ることは全く容易でありませぬが、この鏡さまこそが、それでありませぬ。そして、雛にかしづく子ぎも達の清い心に、それこそ聊かのまさり氣のない、日本の心の清明の美を映せずするにないであります。

肖像模倣に於ける幼児の個性と注意の研究

神戸幼稚園 森 た よ

一、緒言

幼児の精神や行動を研究しますのに、特にその諸性質、諸作用を分析した上でその簡単な一つ一つを實驗的に研究致しますのは學問上大切な事でありますが、その分析が過ぎますと時には幼児の生活さかけ離れたものとなる場合がありますので、今回試みましたことは實驗の條件としては稍々複雑したものではありませんが、幼稚園に於ける幼児の實際的生活にも重要であり又私達が保育にあたつて幼児の指導致します時には非必要な幼児の模倣行爲を問題と致しまして、幼児の個性に注意を見る所の實驗を致して見ました。

二、方法

期日 昭和九年七月

被験者 神戸幼稚園及び神戸愛兒園全幼児

男兒 一二四名

女兒 一〇六名

男兒には東郷元帥の立像（大阪毎日新聞附録）

女兒には人形を抱いた女の子の立像、を模倣させることに致しまして、それを通じて幼児の氣質性格の一端、注意のはたらしき、注意の廣さ、注意の持續等を伺ひ、それ等を通じて幼児の持つ特性なきを見ることに致しました。

方法は幼児を一人一人實驗の場所へ呼び入れまして、肖像畫の前に起立させ、

「此の繪の通りに眞似して御覽。」

「先生がよろしいと言ふまで、ちつこしてゐるのですよ。」
と言つて、男兒の場合には劍さ帽子を、女兒の場合には人形さ帽子をの前に置いておきました。

實驗する方の人は常に三人で、一人は幼児に説明し、一人は幼児のする事を記録し、一人は幼児の出入りを世話しました。

斯様な方法によつて二回實驗をしました。記録は出来るだけ詳細を期する爲豫じめ印刷して置きました次の如き用紙を用ひ一々の動作を記入致しました。

模倣態度に依る直接的性格調査法 (園)

姓名

実験日 昭和 年 月 日 時 頃 天候
 生年月日 年 月 日
 満 年 年 月 (観察者)

真似に掛る時の心構へ (性格観察)	喜んで 真面目くさつて 何気なく 恥しがる てれくさがつて笑ふ
	おどけて { いばる / 笑ふ } いやいやで { ぐすぐす / する / 逃げる } 拒 絶 { 泣く / すねる / 逃げる }
喋舌る (文句)	
真似する時の行爲 (注意の動き又は深さ)	最初によく見ておいてする 繪を見ては姿勢を直し又見ては直しする
	繪をろくに見もしないで姿勢をとる 繪を見てばかり居て姿勢はろくにとらない
劍や帽子の方に氣をとられる ぼかんと立つて居る	
真似した形 (注意の内容又は廣さ)	頭 正しい 前かゞみ 後へのる 右へかたむく 左へかたなく
	上 體 同 同 同 同 同
	肩 いからせる すぼめる 同
	眼の方向 繪 眞直前向きき きよろきよろする
	口 閉 開
	右 手 正 否
	左 手 正 否
	脚 繪と同じ きなつけの形 脚をひらく
足 繪と同じ きなつけの形 兩足をそろへる 兩足をひらく	
形のくずれ方 (注意の持續又は長さ)	(時間) 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
	頭
	眼
	上 體
	肩
	手 脚 足
止める時の行爲 (注意持續のくずれ方)	わき見して場所を動く 先生の方を見て
	喋舌る (文句)
止めた時 (注意持續を破る原因)	いやになつたから くたびれたから てれくさかつたかな 定時以上の秒數
	何か他に氣を散らす原因があつた(原因)
(注意) 1 此の繪の通りの真似をして御覽。(ゆつくりと充分に姿勢をとらせる) 2 先生がよろしいと言ふまでちつとしてゐるのですよ(時間 15秒まで)	

次にその結果について一々申します

三、結果

記録用紙で豫じめ分類しておきました様に

第一節 眞似にかゝる時の心構へ。

第二節 眞似する時の行爲。

第三節 眞似した形。

第四節 形のくずれ方。

について纏めたのでありますが、私達がそれによつて目的を達した事は、

第一節を通じて幼児の個性(氣質、性格)に關して、

第二節を通じて幼児の注意の作用(はたらし)に關して、

第三節を通じて幼児の注意の内容(廣さ)に關して、

第四節を通じて幼児の注意の持續(長さ)に關して、

少しでも理解を深めやうとした所にあるのであります。

(止める時の行爲を、止めた時々の二項目は今回の整理では省略致しました。)

第一節。眞似にかゝる時の心構へ。(幼児の性格、氣質に

關する調査。)

其の一、實驗に表はれた幼児の態度

平常は極めて朗らかに何のこだわりもなく先生に接してゐる子供でも、さて改めて前に述べました様な實驗の場面に一人で連れて來られますと、氣が改まるでも申しませう

か、餘程異つた態度に出ました。然しその時の態度が子供によつて異なりますので、私達は斯る態度を観察することに依つて子供の個性を伺ひ知る一つの手段とすることが出来ると思ひました。それに就いては次の様にして整理をしました。

(一)態度の分け方としては、

(イ)かゝる特殊な環境に消極的な影響を受けずに、課題に従つて行動せるもの

即ち心構への中「喜んで」「何氣なく」「眞面目くさつて」でありまして、それらをまきめて、「十」なる符號を與へました。

(ロ)環境の消極的な影響は確にあるが、一方課題の遂行さういふ觀念にも支配されて後者の方が、僅かに強く行動を支配せるもの。

即ち心構への中「うれくさががつてする」「恥づかしがつてする」「ぐずぐずしながらする」「さういふのであります。これには「土」の符號を與へました。

(ハ)環境による影響が行動を消極的に導く様に働いて課題の實行を阻止せるもの。

心構への中で「ぐずぐずしてやらない」「いやがつてやらない」「もぢくしてやらない」「拒絶」「すねてしない」「部屋に入らない」等で、これには「二」の符號

を興へました。

第一表 (甲)
第一回、心構へ別百分比

		+	±	-	計 (人数)
長	男	70	27	3	100 (100人)
	女	56	35	9	100 (88人)
幼	男	50	29	21	100 (24人)
	女	44	33	22	100 (18人)

第一表 (乙)
第二回、心構へ別百分比

		+	±	-	計 (人数)
長	男	80	20	0	100 (90人)
	女	63	34	3	100 (73人)
幼	男	67	33	0	100 (18人)
	女	75	17	8	100 (12人)

その表の中で長は年長組、幼は年少組であります。之によつて見ますと、

一、第一回、第二回共に

長は幼よりも「+」が多く、「-」が少い。

男は女よりも「+」が多く、「±」「-」が少い。

二、第一回目よりも第二回目の方が

「+」が著しく増大、「-」が著しく減少してゐます。

三、之を個人別にして考へて見るに、

第一回目には恥づかしがつて、しなかつたが、第二回にはすぐ遂行した者が多く有りました。

その結果は次の第二表であります。

第二表
(191人)

I \ II		+	±	-
II	+	99人 (51.9%)	32人 (16.8%)	7人 (3.7%)
	±	14人 (7.3%)	31人 (16.2%)	5人 (2.6%)
	-	1人 (0.5%)	0 (0%)	2人 (1.0%)

第一回には「+」であり乍ら、第二回目に「±」又は「-」になつた者なきにしもあらずであります。左下方の三區の和が七・八%に對して、右上方の三區の和は二三%でありますから、絶體に多いのであります。

即ち第二回目には、餘程積極的に動らくやうになつてゐます。實驗の目的がわかつてしまふに安心して動作にかゝることによるものも考へられます。然し中でもその傾向は長は幼よりも強く、男は女よりも強いのであります。即ち幼及び女は第二回目でも恥づかしがりが残つてゐるのであります。

(II) 前述の「+」「±」「-」の三つに大別した態度の中で、最も多かつた反應形式を求めてその特徴を上げて見るに次の様であります。

即ち男女、長幼共に「何氣なく」「真面目くさつて」が大部分でそれに「喜んで」が少し加ります。之に依つて見

る普通の性格の幼児は、此實驗に於ては大體平氣ではあるが、それに少し嚴肅な氣持ちが加はつた程度的心構へを持つて課題の遂行に當るものが多い事がわか
ります。

次に「土」「一」の原因となるものは矢張り「恥しがる」「こま」「てれくさがる」「こまが同じ位の程度に多いので
あります。

其二、幼児の性格との相關

叔、斯様にして此の實驗場面で現はれました「十」「土」「一」の三つの態度と幼児の個性とどう關係してゐるだらうか、次にそれについて調査して見ました。

我々の幼稚園では昔から園兒全部に就いて個性調査一覽表を作つてありまして、その情意の部の記録方法としまして、氣質や性格を表はす極平凡な言葉、例へば、「勝氣」、「憶病」、「威張り」、「小心」などの三十四の言葉を使用してそれに當る性質を持つ幼児には、その言葉のところに「○」印をつけて、幼児の性格を記録してゐるのでありますが、今その個性一覽表に記録されたもの（即ち平素の觀察による性格の判断）と此の實驗に於て表はされた前の「十」「土」「一」の三種の態度との相關を求めて見ました。これは個人的に調査しますと非常に面白いのでありますが、今は唯全體として兩者の相關を求めました所、次の様な結果を得ま

第三表 實驗に於ける態度と個性との相關

(甲) 男 兒

	十		土		一		計	
	數	%	數	%	數	%	數	%
外向性	238	(73.9)	77	(23.9)	7	(2.2)	322	(100)
		53		43.5		35		
内向性	211	(65.1)	100	(30.9)	13	(40)	324	(100)
		47		56.5		65		
	449	100	177	100	20	100		

(乙) 女 兒

	十		土		一		計	
	數	%	數	%	數	%	數	%
外向性	153	(64.6)	83	(35.0)	1	(0.4)	237	(100)
		46.7		40.7		12.5		
内向性	174	(57.7)	121	(40.0)	7	(2.3)	302	(100)
		53.3		59.3		87.5		
	327	100	204	100	8	100		

した。
但し、此處では三十四の性格標語を大體、「淡路」、「岡部」兩先生御發表の向性検査の質問要項にあてはめて、外向的なもの十七と、内向的なもの十七とにわかれ、それ此の實驗に於て「十」「土」「一」の各々の態度をさつたものと相關を求めたのであります。
その結果は次の第三表に示されて居ります。

第三表の結果を見るに實驗に於ける態度と性格との間には「十」の相關が認められ特に「一」の態度と内向性との間には著明な相關が認められます。然し「小心」、「憶病」を評價されてゐた幼児でも「十」の態度に出たものもあり、「勝氣」を評價されてゐた幼児でも「一」の態度に出たものもあるのでありますから、此の實驗のみを以て個性を評價するわけには行きませんが相當に信頼性のある觀察が出来ることを知るのであります。殊に此の實驗に於て「一」即ち拒否的に出た幼児は「問題の子供」として「關心を要します」。

女兒の方の結果では、一般に女兒は内向的の性格が見られ、本個性調査表に於ても女兒の記録では内向性の記録が多くなつてゐる。こいふ事を念頭に於て見て戴く事を要します。

第二節。眞似する時の行爲。

第二節以下は第一回目の實驗の結果に依らず全部第二回目の實驗の結果によりました。(何ミなれば、第一回目實驗では實驗に對する心構へが充分できて居ないのが多かつたからであります。)

眞似する時の行爲は、肖像模倣に掛るべきの注意の配り方、即ち「注意の作用、深さの方面に關する研究であります。

その結果

一、注意のよく行届いたもの

第四表 注意の作用に關する結果

	男		女	
	長	幼	長	幼
注意のよく行届いたもの	(58) 61.05%	(9) 50.00%	(38) 71.70%	(4) 33.33%
輕卒だが注意するもの	(18) 18.95%	(4) 22.22%	(6) 11.32%	(7) 58.33%
注意の散漫なもの	(17) 17.89%	(4) 22.22%	(6) 11.32%	(0) 0%
全然注意しないもの	(2) 2.11%	(1) 5.56%	(3) 5.66%	(1) 8.33%
計	(95) 100%	(18) 100%	(53) 100%	(12) 100%

女、長、幼の別に整理すれば第四表の結果を得ました。

繪を働かせる程度を右の四種に分ち、それを、男、

繪をよく見ておいて模倣する。

繪を見ては、姿勢をなをし、又見ては直しする。

二、輕卒ではあるが、注意はしてゐるもの。繪をろく／＼見もしないで、姿勢をさる。

三、注意の散漫なもの。

繪を見てばかりゐて姿勢はろくにさらない。

劍や帽子に氣をさられる。

四、全然注意しないもの。

ボカンとして居る。

右の結果

一、大體全幼児の五〇%乃至六〇%位までの者はよく注意を働かせて居ります。中で最も多いやり方は「繪を見ては直し見ては直しする。」ものであります。

二、輕卒なやり方をするものは、男兒よりも女兒に多い。
三、然し又その表の三段目の氣の散りやすい者だけを見ますと、女兒よりも男兒の方に多いのであります。

四、全く注意しないといふものは、極めて少なく、之れは寧ろ性格的に異狀な事が原因となつてゐます。

第三節。眞似した形。

之は注意の範圍、(廣さ、行きわたり等の注意の内容)に關する研究であります。

其の一

先づ注意の廣さを得點で表はすこゝを企てました。それには、頭、上體、目の方向、口、右手、左手、脚部、足、が正しく模倣出来れば一點宛、持ち方はその正確さに依つて二點及び三點といふ様に合計十點になる様にしておきまして、採點したのであります。その結果、男、女、長、幼、ご得點の關係は次の様であります。

第五表甲に依りますと男兒よりも、女兒の方が幾分成績がよいのでありますが、併し、男女はその模倣對照が異つてゐるので確かな比較は出来ません。此の外に肖像は全

第五表 (甲) 注意の内容(得點)

	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	7.27	6.12	7.66	7.40
平均錯差	1.21	1.42	1.25	1.48

第五表 (乙)

平	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	7.27	5.77	7.34	5.70

を持つ事が見られます。

其の二、

次に注意の集められた個所について整理して見るこゝ、しました。

その結果によりますと、

一、男女共、頭、上體、右手、左手はよく模倣され(九〇%以上)

目の方向、口は中位(七〇%乃至八〇%)

二、脚部及び足は男兒に於ては困難(一〇%乃至三〇%)女兒に於ては中位(五〇%乃至六〇%)之れは模倣對照の相違に依るものと思ひます。

三、道具の持ち方は、大體四〇%乃至五〇%の成績で出

然異つた形をしたものが數名ありまして、それを零點として加へますと、その平均は第五表乙の様になりました男女大體同じになります。

然し何れにしても模倣に於ては幼兒は割合に注意の範圍が廣く十の内六乃至七迄の模倣の正確さ

来ております。

以上を要するに模倣は上半身の方がよく出来、このこゝは注意が上半身の方に多く用ひられて、脚部の方は等閑せられてゐるこゝを證明してをります。尙換言しますと、人間の表現に於て注意をひくのはかゝる幼児に於ても主として、上半身にある事を知るのであります、そして、よく注意する者のみが脚部、及び道具の持ち方にも氣を用ひる事を示してゐると思ひます。

其の三、模倣に於ける左右性。

此の眞似した形から得た興味ある結果として私達は、此の模倣に於ける左右性も次に述べる非寫生的模倣の二つを擧げることが出来ます。

そのうち、此の左右性と言ひますのは、私達が肖像に對しました場合、肖像も左右性を等しくすれば、持ち物の方向が反對になり、若し持ちものの方向を等しくすれば左右性が反對になるのであります。私達はこの事に注意致しまして、前者を正、後者を鏡映的として整理して見ました。

その結果は第六表の様であります。

此の表に依りますと、私達は幼児が鏡映的模倣をするのが非常に多い事を明らかに知り得るのであります。これは、平常幼児に遊戯等を指導する場合にも充分呑み込んで、指導者はそのつもりで幼児に形を示すべきことを明

第六表 模倣の左右性

	男		女	
	長	幼	長	幼
正	23	17	22	23
鏡映的	75	78	72	46
其他	2	0	0	31

目に端然と「氣を付け」の姿勢をとり、劍をさるや否や「スラリ」と抜きまして、軽く左右に振り暫く續けたのがありました。

かゝる態度に於て注意を要することは、これは必しも幼児が模倣をせよといふ命令を、はき違へたのではなくして、幼児は目の前にある肖像を模倣しなかつたけれども、何かその肖像に關聯して幼児の心にあつたものをそこに再現し、又はそれを現はそうしたを見るべきものがあります。

即ち劍を振るのは、軍人の勇ましき、嚴肅さ、又は將軍の威厳を自分の心にあつた軍人を再現したものであると見得るのであります。

際に教へてゐるものであります。
其の四。模倣に於ける非寫生的な態度

次に此の實驗に於て（第一回第二回を通じて）

「この繪の通り眞似をして御覽。」と言ひましたのに繪はまるで違つた形をした子供が數名ありました。

例をあげて見ますと、男児（年長組）の一人は肖像の前に極めて眞面

第四節。形のくづれ方。

次に幼児が肖像の前で模倣の形を大體備へる又は或形で落ちついた瞬間にストップウオッチをおさへましてそれから十五秒間觀察したのであります。

その間

其の一、始めて動くまでの秒數。

其の二、始めて動かした身體の部分。

其の三、最もよく動いた部分。

其の四、動搖性の度合。(これは動く都度その秒數の所に點をつけたのですが、その點の數によつて判

斷したのであります。)

以上について出来るだけ調査致しました。是等は大體、

注意の持續(長さ)についての研究であります。

其の一は注意の持續時間。

其の二は注意の散る最初の機縁なるころの部分。

其の三は注意の散る時にその最も向き易い方向。

其の四は注意の散る度合。

に就いて、去々研究の手掛りとなるものも存じます。

その結果は次の様であります。

其の一、始めて動くまでの秒數

此の計算に於て十五秒間、動かなかつた幼児は十六秒として計算しました。

第七表 注意の持續 (秒)

	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	9.89	9.05	6.14	6.08
平均錯差	5.93	4.95	4.76	4.11

之に依りますと、注意の持續に於ては個人差で非常に大なのであります。が、平均しました所、男兒九秒、女兒六秒、位であります。此處では女兒は男兒に比して注意の持續が非常に短いことが見られます。

其の二、始めて動かした部分

此の結果について大體申しますと、

最初に最も動き易い部分は、眼、口、

手、指であり比較的動きの少ない部分

は、頭、足であります。上體、肩、脚部等は殆んど動かないものであります。

其の三、最もよく動いた部分。

これは大體其の二の結果と一致してゐますから省略いたします。

其の四、動搖性の度合。

この整理では十五秒間一度も動かなかつたものを零點として見ました。

之れに依つて見ますと、男兒は平均三回餘、女兒は平均六回餘り動いた事を示してゐます。矢張り第七表に見たと同じく男兒の方が女兒よりも注意の動搖が大なることが示されてゐると思ひます。

第八表 動搖の度合

	男		女	
	長	幼	長	幼
平均	3.38	3.05	6.13	6.64

四 總括

以上、私達は、幼稚園幼児に肖像を模倣させるさいふ一つの極めて具體的な場面に在る實驗をもつたしまして、幼兒の個性に注意に關する研究を、四節、十項目にわたりまして調査しましたが、それを通じて見ますのに、

其の一、極めて具體的な場面を中心として實驗研究しますことは、極めて困難な仕事ではありますが、之は私共が平生幼兒を保育して行きます上に非常に重要、且、有效であることを知り、又かゝる實驗を通じて思はぬ收穫(例へば、幼兒の特別な個性を發見したり又幼兒の鏡映的模倣の發見)のあることを面白く感じました。

其の二、全般的には、本研究によつて

- I 單獨に一室に呼ばれた時のその個性のあらはれ
- II 模倣をするところの中にあらはれた注意の作用、内容、持續等、幼稚園幼兒の年齢に於ける發達程度、及び男女の差

等を求め、且、理解し得たことを感ずるものであります。「尚本研究の方法と整理とに關しましては、神戸市立兒童相談所の加藤先生の御指導を得ました事を附加へて置きます。」

フレイベル

倉橋惣三著

岩波書店發行の、大教育家文庫の中の一書である。この書は、フレイベルを、その教育精神と、その教育的直覺に於て看ようとした。従つて、フレイベルが教育思想家として特色づけられてゐる腹想的理論方面に就て多く語らず、又所謂フレイベル正統派から殆んど信條化されてゐる象徴主義的教育方法に對しても、寧ろ批判的態度をなすへ執つた。これは、フレイベルを紹介するとしては忠實でないかも知れないが、この教育的天才を、その眞に尊重すべき所以に於て尊重したかつた爲である。フレイベルに關しては、既にその主著の好邦譯があり、又、數種の好著作も刊行せられてゐる。わたしは、夫れ等を讀者の前に奨めて、この小篇では、たゞ我觀フレイベルを描くことを宥して貰つた。

以上の序文によつて本書の主旨のあるところがよく諒解されることと思ふ。尚ほ、目次を挙げれば次の如し。

- 一、「馬鹿爺さん」
 - 二、魚水を得、鳥空に翔ける
 - 三、三つの自己教養
 - 四、再び教育へ
 - 五、「人間教育」
 - 六、幼かりし日
 - 七、幼兒教育
 - (一)キンダーガルテン
 - (二)恩物
 - 八、女子教育
 - (一)母性尊重
 - (二)母の歌と愛撫の歌
- 讀者の參考のために

教育 (二月號)

教育 二月號は、就學前の教育として特輯せられ、幼兒教育者として關心を持たなければならぬ多くの問題を取り扱つて居られる。御一讀を切にお奨めする次第である。(編輯部)

岩波書店(神田區一ツ橋二ノ三)

劇あそびの脚本

麴町區富士見幼稚園 山村 ぎよ

〔其の四〕「不思議なお人形」

(一幕一景) (十分)
(お雛祭用女兒全體にて)

〔登場人物〕

お店の主人 二名

買 手 三名

人形 (いろ〜)

イ、日本人形……………二

ロ、西洋人形……………二

ハ、キュービー等……………五

各人形は適當に

幕開くとお店にいろ〜の人形が腰かけてゐるその前でお店の主人等話し合つてゐる

主A「もうぢきお雛祭よ」

主B「そうねぢこのお家でもお雛様やお人形さんをおかざりしてあるわね」

主A「私達のお店へもお客様が御見えになるわ」

主B「お店をきれいにしておきませうよ」

主A「え〜」 二人でお人形やお店のお掃除を始める 客A買ひ

に來る

客A「ごめん下さい」

主A「いらつしやいませ」

客A「お人形を見せて下さいな」

主B「ごうぞ」 椅子をすゝめる、客坐る(腰かける)客B買ひに來る

來る

客B「ごめん下さい」

主A「あら、いらつしやい」

客B「お人形さんを見せて下さいな」

主B「ごうぞ」 椅子をすゝめる 客腰かける 客C買ひに來る

客C「ごめん下さい」

主A「あら又お客様よ いらつしやいませ」

客C「お人形さんを見せて下さいな」

主B「ごうぞ」 椅子をすゝめる 坐る

主A「一番始めにおぎりの上手な日本人形をお目にかけてま

すわ」

主B「お人形さん上手におぎつて頂戴ね」 人形うなづく二人

で日本人形を正面につれ出す踊り(さくらさくら) 其の他適當に

客一同「まあお上手だこさ」拍手

主A「こんごは西洋人形がダンスをします」

主B「お人形さんお上手にね」 人形うなづく二人で正面へつ

れ出す、ダンス一回遊戯(おじぎ)其の他適當に

客一同「まあお上手だこさ」

主A「今度はキュービーチャンの番よ」

主B「さあ皆さんでうたつて上げませう」 うなづきつゝ両手

指をひろげたまゝ正面にならぶ(二人で位置をなほす)(キュービーチャンハダカンボ)の遊ぎ一番だけ唄ひおどる

客三人「まあお上手だこさ」拍手

主A「一番始めのお客様はよろしいでせうか」

客A「私日本人形にするわ、大きい方はおいくら?」

主B「五圓です。さあさうぞ」 客A金を渡して人形を一人つれ去る

主A客Bに向つて

主A「あなたはそれがよろしいですか」

客B「こちらの西洋人形にしませう、おいくらですか」

主B「三圓です、さあさうぞ」 客Bお金をわたしてつれ去る

主A「あなたはどれ」

客C「私一番向ふのキュービーさんがいゝわ、おいくら」

主B「一圓です、さあさうぞ」 客C金を渡してつれ去る

主A「ずいぶんうれたわね。」

主B「え、今度はお家のお人形さん達でおうたのおけいこをしませう」 お雞様の唱歌一回歌ひ終る頃

客Aさつきの人形をつれて大急ぎでくる(あわて)

客A「ごめん下さい」

主A「あらさつきのお客様よ」

主B「さうしたの」

客A「お家へかへつたらこのお人形さんがおぎりをおぎらなくなつてしまつたのよ」

主A「あらあなた、お人形さんにおやつあげるのを忘れたでせう」

客A「あゝほんご、忘れたわ早くかへつておやつにしませう」

客A人形をつれかへるとB客人形をつれてくる

客B「ごめん下さい、ごめん下さい」

主A「あら又さつきのお客様よ」

主B「さうしたの」

客B「このお人形さんお家へかへつたらダンスをしなくなつてしまつたのよ」

主A「あらあなたもおやつをあげるのを忘れたでせう」

主B「お人形さんおながすいたのね」 人形うなづく

客B「あゝそうくすつかり忘れでるたわ、早くかへつてお

やつにしませう」 人形をつれかへるとすぐ客Cキュービ

ーをつれて来る

主A「あらまたさつきのお客様よ」

主B「さうさうしたの」

客C「このキュービーさん、お家へかへつたらお手々もあんな

よも一寸もうごかなくなつてしまつたのよ」

主A「あらあなたもキュービーさんにおやつあげるのを忘

れたんでせう」

主B「きつこそようよ、キュービーさんお腹がすいたのね」

客C「あらほんま……早くかへつておやつにしませう」

キュービーをつれ去る

主二人「まあおかしい忘れんぼのお客様達ね」

主二人「お家のお人形さんもおやつにしませうね

一同大きくうなづく

幕 終り

(其の五) 春の神様 (二幕四景) (十五分) (年長組男女兒合同)

(登上人物) (時) ある日の朝から

子供……………四人 (場所)

サル……………四 第一景 ある町かど

ウサギ……………四 第二景 山の中

熊……………三 第三景 山の中

鹿……………三 第四景 きれいな野原

狸……………三

春の神様……………一

その子供……………二

春風……………二

お花……………八

蝶……………二

序 (幕の中で保姆が話す)

寒い、風袋をしようた北風のおぢさんも遠い、お園へ行つてしまひましたもうぢきあたゝかい春風を一ぱい袋に入れた春風のおばさんがやつて來ますそうするとあのきれいな櫻のお花がさくんです櫻のお花が咲く頃には僕たちは……私達は一年生になるんです
春風の叔母さんはどこからくるんでせうか櫻のお花はだれがさかせて下さるんでせうね

(第一景) 靜かに幕あく

子供二人歌を唄ひながら(適當な歌)登上舞臺を一廻りした頃正
面をむく

A「ねえB子さん」

B「なあにA子さん」

A「私達もうぢき一年生になれるわね」

B「え、そうよ私今度の日曜日ランドセル買つて戴くのよ」

A「私も……早く一年生になりたいわ」

B「でも櫻のお花が咲く頃にならなければ一年生になれないのよ」

A「ほんご……あのきれいなお花誰がさかせて下さるんでせうね」

B「春の神様ぢやない?」

A「そうよ、きつこさうよ」

B「ねえA子さん二人で春の神様お迎へにゆきませうよ」

A「え、それがいゝわ」

二人肩をくんで歌を唄ひながら退場

(歌) 春よこひ早く來い、お家の前の櫻の木つぼみもみ
んなふくらんで、はよさきたいと待つてゐる。

二人又唄ひつゝ登上二人の子供に行き逢ふ。

男兒「A子ちゃんさB子ちゃんさこへゆくの」
二人

女兒「春の神様お迎へにゆくのよ」

男兒「なぜ」

女兒「だつて私達早く一年生になりたいんですもの」

男兒「あゝそうかぢやあ僕達も一諸にゆくよ」

二人
四人で唄ひながら退場(春よこひ……暮……)

(第二景)

幕あくと同時に「森の水車」のレコード前の方のみかけて小鳥のなき聲をきかせるうさぎがびよん／＼はねて来る(ピアノ)でリズムを取る)

適當の曲でおどる子供四人唄ひながら登上うさぎを見てとまる

女A「あらうさぎさんよ」

女B「うさぎさん達どこから來たの」

ウザギ「向ふのお山から」

男A「春の神様知らない」

男B「教へてよ」

ウザギ「お山を一つびよんささんで行つてごらん」

兎退場

子供「さうもあがたう」

唄ひながら(春よこひ)退場 スキップでおさる登上おさるを見て、

女A「あらおさるさん達が晝寝をしてゐるわ」

女B「きいて見ませう」

四人で「おさるさん、おさるおさる」

男A「春の神様知らない」

おさる「お山を一つびよんここえて行つてごらん」 スキッ

プでおさる退場

四人「ごうもありがたう」

唄ひながら舞臺を大きく一廻りする頃熊登上

女A「あつ……くまさんよ」

女B「きいて見ませう」

男A「春の神様知らない？」

熊「お山を一つびよんここえて行つてごらん」

四人「ごうもありがたう」

四人唄ひつゝ(春よこひ)退場

熊「皆をよんでいつものおさりをおさうよ」 四方へ向つて

呼びかける

熊「オーイ〜」

兎、狸、鹿、猿等それらの様子をしながら登場曲に合はせて
輪になる

一同遊戯(すべりつこ)

つるり〜つらら……

つるり〜つらら……

雪の凍つた月夜の晩に

山の熊さん兎さん

猿さん鹿さん狸さん

皆揃つてすべりつこ

おさり終ると一同前の様な様子をしながら退場、レコードで小
鳥の聲、四人の子供つかれた様子をして登場

女A「私つかれてしまつたわ」

女B「私も」

男A「ずいぶんお山を澤山こえて来たね」

男B「僕はねむくなつちやつた」

女二人「こゝで少し休みませう」 一同ねむる

レコード(メンデルソーンの途中まで)

レコードにあわせて春風舞臺を舞ひまわる (春風が退場してか
らレコード止む)二人目をさまし

男A「あつ、さてもあたゝかくなつたよ」 女児二人も目をさ
まして

女A「あら、向ふの方が明るくなつて来たわ」 一同とんで行
く

春の神様お供をしたがへてきれいな籠を持つて登場

(色紙をきつた花ふぶきを入れる)

四人「春の神様今日は」

神「あなた方はどこからいらつしやつたの」

女A「お山のお山の向ふから」

女B「春の神様お迎へに來たのよ」

男A「早く櫻の花をさかせて下さい」

神様「さうして」

男B「早く一年生になり度いから」

神「それではお花を咲かせてあげませうね」

櫻のお花春ですよ、お山において春ですよ、お庭にお出で春ですよ。と三回に言ひながらお供の者と一緒に花ふぶきをまくと

同時にお花の子供登上、二人づゝでお花を造つてしやがむ

女B「まあきれい」

男二人「きれいだなあ」

神様「櫻のお花さん達さあ踊つて頂戴」

適當な踊り一回して又元の場所にしやがむと二匹の蝶登上その間を舞ふ

(レコードその他適當の曲) 舞つてゐる處で

—— 靜かに幕 ——

附

昨年五月から私のつまらぬ經驗發表をつゞけさせていたゞきました、この他「のらくろ」、「小鳥の學校」、「お花と蝶」等年少組用のものも短いお話のある一つのテーマを取つて造つて見ました、紙面にもかぎりのある事と存じ一まづ筆を止める事といたし

ます、以上のべましたものについてどうぞ御遠慮なく御批評なり御意見なりお聞かせ下さいませ様お願ひ申上げます。

(昭和十四年一月)

(三六頁より)

もう直ぐお正月です。風や羽子板なども出來ました。寒くなつても、皆小さい人も、遠い處の人も元氣で來ますことを嬉しく思ひます。時には泣いて來ることもありますけれど。お辨當の時は、熱くて持てない程に燻まつた御飯を頂けるのがうれしいことです。ラジエーターの上の箱の中に御飯だけ入れて煖めて居ります。漸くスケート場に水を注れ始めました。

北の方はどんなに寒いでせう。でも皆元氣でスケートに、櫓遊びに此の冬を樂んで居るのです。南の瓦房にも愈々其の時が來ました。

十二月十三日

附、これをお記していたゞいた頃は十二月十日前後で、まだお寒くなりきらぬ時であつた様でございます。

東京でさへびり／＼するやうな今日この頃の酷寒、瓦房店のお寒さを遙かに想像いたして居ります。

(編輯部)

南の瓦房

滿洲房幼稚園

田中 美枝

今年は五十五年振りの寒さが来ると云ふことですので、一體どんなでせうと思つてゐるのですけれど、何時までも暖かくて十二月の八日と云ふのに、雪の後しとしと雨が降つたり、お砂場で長いこと遊べたなど本當に珍らしいことでした。でも時々寒い日があつて此の間の朝は九時に零下十度でした。十時になつて零下八度、それでもラヂオ體操は外でします。僅かの間なら寒氣の中で身が緊張つて體によいさうですから外套も何もなしで出ます。第二の頃から手が針で刺される様に痛くなつてだん／＼酷くなるのですけれど、皆元氣を出して五つの子も頑張つてやつて居ります。風の吹く時は尙寒さが身に染みるので

すが、内地の様な濕つぽい寒さとは違ひます。こんな事自慢さうに申しても北滿の方と比べましたら何でもないことです。早くスケート場に水を入れたいと、皆もつと／＼寒くなるのを待つて居ます。池ではもう滑つてゐるのですけれど、學校の運動場一杯に土手を造つてスケート場が出来るのです。

毎日お辨當の前に皆外出の支度をして、餘り風がひどくて寒さも酷しい時には、此のスケート場を一廻り駈けて來るのです。暖かい日には山か川か、たまには池の方へも出掛けます。春夏秋毎日出掛けた山ですけれど、冬になつても暖かい日には三十分か、一時間近く遊び歩いて來ることもあります。運動場の横が小川で橋を渡ると直ぐが山ですから、幾つもの山を彼方此方と、鐵柵を傳つて登つたり、狭い涯道を歩いて、石ばかりの急な所を四這ひになつて攀登つたり、谷間への細い道を迂り降りたり、鐵砲なども持つて出掛けたり、皆兵隊さんになつて進むのです。

秋には毎日お辨當を持つて登つた山、ど

んぐりを拾つた山、「アシア」や「ほど」長い／＼貨物列車も見下した山、柏餅の柏のある山、初茸の出る山、綺麗なお花も摘んだ山、時々兎が飛び出して駈けて行きます。龍冠山の頂上には岩が澤山突出してゐて、それが馬になり駱駝になります。ライオンも虎もゐます。「先生蛙がゐるのよ」と教へて呉れたのも子供二人其の背中に乗つてゐる岩なのです。本當に蛙が兩手をついた恰好そっくりです。此處から西の山を寫生もして見ました。

河をじゃぶ／＼渡つて遠足に行つた遠い西のお山が見えます。毎日お山へ行かうと云つた子供達です。川の上には土筆が澤山出ますし、春の野の花が咲き亂れます。おたまぢややくしを汲ひ、とんぼを追ひ、笹舟を浮べ、目高や鮒や、小さな蝦や、泥鰌まで掴へた川、其の川に水が張つて、水の澄んだ水の中に、遊いでゐるのが見えるましたけれど、今はすつかり厚く凍つて了ひました。小さな水溜りが薄く眞白に凍つた所は、ばちん／＼と踏み割つて歩き、物

凄い音を立て、稻妻の様にひと割れ、驚いて飛び出しては、雷の様だつたねと喜んでしました。其中うっかり一人が足を突き込んで長靴を濡したので、それからには要心して身代りに大きな石を投入しては、面白い音を聴いたりしてゐます。もう此頃は平氣で滑つて歩けますが。

時々山から満人の小さい部落の方へ降ります。百姓家のひるげのかまどを見せせて貰ひました。粟を煮てゐます。鶏が走つて家鴨が體を振り／＼寄つて來ます。大きな豚が側へ寄つても平氣で寝てゐます。起き上るとぶ／＼と小さい尻尾を振つて歩き出す、子供達も棒切を拾つて尻尾にして、ぶ／＼／＼言ひながら歩いて行きます。これもお晝の御飯を食べてゐる牛と驢馬を飽かす眺めです。高梁や玉蜀黍をころり／＼とろはが挽く大きな石臼が休んでゐます。

満人のお婆さんが、小さい男の子を連れて歩いて來ました。このお婆さん、木の枝切につけた大きな日の丸の旗を持つてゐるのです。何だか嬉しくなつてお婆さんに笑ひかけましたら、お婆さんも顔を縦ばせ

て、何か一言云ふのですれど、聞き慣れない言葉なのでどうも分りません。でも分つた様な顔をして領いて居ますと、子供達が「先生何て言つたの」と聞きます。「お婆さんのお家にも日の丸の旗を立てますつて」

「さう」と又お婆さんを見上げ「家にも滿洲國の旗があるよ、誰の家でも日本の旗と滿洲國の旗立てるんだねえ」とうれしいことを言つて居ます。

苗甫と種鶏場が直ぐ近くにあります。可愛い澤山のひよこ、眞白の鶏、クローバの道、苺島と葡萄棚、林檎畑、小さい白い花が咲いて、秋には眞紅な實が輝くのです。梨も成つてゐました。杏の花が咲き、まんじゅうみ、躑躅、れんぎよう、柳木にしもつけ、さんざしと、甘い匂のはまなすとライラック、藤の花も、春は一度に花が咲いて、若葉の緑とが美しいことです。さうして直ぐ暑い夏が來るのです。

今は何處も裸で、苗甫には大きい／＼穴藏が出來て白菜が天井まできつしり積んであります。

幼稚園の庭にも小さい穴藏を造り、兎の爲の野菜を貯へてをります。十二月九日

昨日は又雨でしたが、今日は午前九時に零下十二度と云ふ急降下振りです、風が強いので流石に外で、ラヂオ體操も出來ません。室内の遊びは何處も同じと思ひますが、兵隊ごつこには軍用犬が活躍してゐます。お人形を負ふ帯を首に巻きつけて、四足になつて働いてゐます。ですから兵隊さんにお送りした慰問袋の中の手紙にも、「兵隊さん日本の軍用犬は死んだですが。僕も軍用犬になります」などと云ふのがありました。装甲自動車に爆弾も積み乗り込んで、日の丸の旗を立て、戦地へ進みます。支那の陣地や城も出來ますし、トラック、軍艦、戦車、飛行機と何時も續いてゐます。お人形遊びの女の子達の家が、時には野戦病院になつたりもして。

水栽培の支那水仙が大きくなつて、蕾も伸びました。この花が咲いたら畫き度いなわ、先生このお花咲いたらかゝうねと言つて居ます。鉢種の球根類も芽が伸びました。

フレール賞 選外佳作の八

かくれんぼ

N
子

セッセッセ。

一つ ひよこは 米の蟲 タイロクネンネ

二つ 舟には船頭さんが タイロクネンネ

淳子ちやんミ 芳ちやんミ 京さんミ 満ちやんが 淳子ちやんのお座敷で まあるくお座^すりして、セッセッセのお遊びをしました。

三つ 店には番頭さんが タイロクネンネ

四つ 横濱異人さんが タイロクネンネ

五つ 醫者さんは藥箱 タイロクネンネ

くりかへしてゐるうちに、みんなもういやになりました。

「何か、ほかの事して遊ぼうよ」「お外へ出て戦争ごっこしやうか」

「なら、かくれんぼはごう?」「でも たつた四人ぢやつまんないなア」

「それが、いゝわ」「しやうく」

皆が、お外へミび出しました。

「ジャンケンボン」「アイコデホイ」「ホイ」「ホイ」

鬼は満ちやんにきまりました。

満ちやんは、お椽側の柱に凭つて二つのお手々でお眼々を押へて

「ヒイ、フウ、ミイ、ヨチ」ミかぞへました。

「もういゝかい」「さらふささこかで」「まあだよ」「言つてゐます。」

「十三、十四、十五、十六」「もういゝから」

「まあだよ」

「二十一、二十二、二十三、二十四」

「もういゝかい」「まあだよ」

「さうさう百かぞへました。」

「もういゝかい」「言ふさ 遠くの方で」「もういゝよ」「いひました。」

満ちやんはお眼々をあいてあたりを見廻しました。

サア 皆は さこへかくれたのでせう

誰が 一番先きに見つけられるでせう

芳ちやんご京さんは お庭の袖垣のかげに 小ちやくなつて しゃがんでゐました。

淳子ちやんは ひさりで お裏の土藏さお隣りの板堀さの狭い間隙へ隠れました。

探しに來た鬼の足音は 二度ばかり近づいて來ました。其度に 淳子ちやんは ビク／＼してゐましたけれど二度さも 「ゐないわ」さいつて 向ふの方へ行つてしまひました。淳子ちやんは

んは

「まあよかつた」 ひさりにこくしてゐました。

フト見るさ 土藏の土臺石の下に小さな穴があいてゐます。細い枯枝を拾つて 其穴へさし

込むさ

スッスッ さ はいつてしまひました。

又枝を押し込むさ それも亦すつかりはいつてしまひました。

「何て 深い穴だらうさ又もう一度木の枝を押し込むさ それもスッスッさ はいつてしま

ひました。もう押し込む枝がなくなつてしまひました。

みてゐるご其穴から 黒い蟻さんが一匹這ひ出して來ました。さうして

「お嬢ちゃん 私たちの地下室へ御案内ませう」を申しました。

淳子ちゃんは 喜んで蟻のお背へのせてもらつて、エレベーターで ぎん／＼地下室へ降りて行きました。あたりは眞暗で 何がだかわかりません。

でも「ドン」エレベーターの しまつた處は、赤や青の電燈が 眩しい程に輝いてきてきれいです。

「サア べつちへ」を

蟻さんにつれられて行きますと、きれいな御殿の眞中に蟻の女王様が ニコ／＼と笑つて「オイデ／＼」をしてゐらつしやいます。

女王様のお傍の素敵に立派なお椅子に腰掛けて、お行儀よくしてゐますと、家來の蟻達が澤山行列して、御馳走を運んで來てくれました。

キャラメルだの チョコレート だの大すきな甘いものばかり、淳子ちゃんはもうお腹がパンクしさうです。

では少し お散歩に出かけませう と女王様につれられてお庭へ出て見ますと

これは／＼右へ行く道や左へゆく道や

西にも 東にも 斜にも 澤山々々塹壕の様な道がついてゐます。どの道もどの道も大賑はひです。

「カキモチ」や、「アラレ」の香ばしい匂ひをさせながらいくつも／＼くわへて來る蟻もゐます。伊賀の水月鍵屋の辻はヨウ とうたひながら、大きな小唄せんべいを引つかついで來る凄

いのも居ます。

「カタヤキ」のまるいのを 笠の代りに頭へのせておぎけて居るのもあります。

「きな粉」のこぼれたのを見つけた と 知らせに來るのもあります。出かけるもの かへる

ものなき賑やかな事賑やかな事。上野の「五の市」よりも賑はつてゐます。

さうしてその蟻さん達が、途中で出會つたりきつてお首をかしげて、ごあいさつをしてゐるのです。

エンヤ／＼と掛け聲勇ましい方を見るに、これは又大きな蟬を大ぜいが寄つて押ししたりして運んでくるのでした。

淳子ちゃんが、感心してゐるに、女王様がおつしやいました。

「かうして今のうちに、食物を澤山貯へて置くに寒い冬が来ても大丈夫ですし、雨が降つてお外へ出られない日が続いても、平氣で居られます。

それに、此お家は鐵筋コンクリート造りですから、飛行機が来て爆弾を落してもこわれな
いし、毒瓦斯だつて、上のお窓さへ閉めれば、ちつともこわくないのですもの、ほんさうに
いゝでせう。

あちらには、廣いお砂場もあるし、おもしろい行列をしてお目にかけますからごゆつくり
していらつしやい、^ん

いはれましたけれど、淳子ちゃんは何だか急にお家へかへりたくなくなりました。
するに女王様は

「では又、いらつしやいね」といつて、お土産を澤山下さいました。

淳子ちゃんは

「有がたうございます」とお禮を申上げて、蟻さんに送られて又暗いエレベーターで、上へ上
へと昇ります。フワアとして大變好い心持でした。涼しい風が吹いて俄に明るくなつたので
お眼々をこすつて見ます。淳子ちゃんは矢張さつきの土藏とお隣の扉にゐるのです。

お日様はいつか西のお山へおはいりになつて、鳥がカー／＼とさないて行きます。
満ちやんの鬼はさうしたのかまだ探しに来ません。

おしまひ

フレーベル賞 選外佳作の九

南京城

直野カツ

勇ちやんのお家はすぐ健ちやんのお家のお隣です。そして二人は幼稚園でもお机がお隣同志で、ミてもミても仲好です。けれども戦争ごつこの時だけは二人共大將さんになりたいので何時も敵味方に分れて大將になります。

今日は十二月だのにまるで春の様なお日様がボカ／＼に當る暖い日曜日です。勇ちやんミ健ちやんは、お友達がみんな集つて來たら戦争ごつこを仕様ミ思つて、腰に劍をさしたまゝコマを廻して遊んでゐましたがさうしたのか今日は誰も未だ見えません。

『ねえ健ちやんお山に登つて見ない。南京城が見えるかも知れないよ』急に勇ちやんが云ひ出しました。『さうして？』健ちやんは不思議そうな顔をして云ひました。『此の間先生が南京城に日の丸の旗が揚つて日本の兵隊さんが居るんだつておつしやつただらう。見たいねー』『うーん見たいね、だけぢお山に登つたつて見えないだらう』『あのね高い所に登るミ遠い所が見えるのだつて此の間お兄さんが教へて下さつたよ』『さうほんミー登つて見様か』登ろうよ』

早速二人はぎん／＼お山に向つてかけ出しました。小時走るミ、二人共苦しくなつて來ましたので、今度はゆつくり歌を唱ひ乍ら登りました。汗を拭き／＼手前の方の一番上によつミ登るミ、二人共バンザアーイミ大きな聲を出しました。眼の前に仁川の町が一眼に見えます。さ

の家にも日の丸の旗が立つてゐます。今日は兵隊さんが出征なさる日なのです。赤いお屋根のお家や、青いお屋根のお家や、黒いお家根のお家が並んでゐます。その中に交つて朝鮮人の丸い菓屋根のお家が見えます。やつぱり日の丸の旗が立つてゐます。お家の其の向ふには廣いくお海が見えます。そして、大きな船や小さいお舟が浮んでゐます。お海には陽があたつてキラ／＼と輝いてゐます。

『きれいだねー健ちゃんお家はどこかしら』『見えないねー』『南京のお城が見えないねもつこ一番上まで登らうよ。』

二人はお八つに頂いたキャラメルをポケットから出して食べ乍ら、一休みするま又手をつないで上へ／＼登つて行きました。そしてやつこ上に登つて見ましたがさつきの景色が小さく見えるだけで、ず／＼お海の向に山が見えるばかりです。

『見えないねー勇ちゃん』『うーんあの山のまだ向ふかねー』『もつこ高いま／＼に登らないま駄目なかねー』

『お兄ちゃん此の間遠足に行つた山から京城が見えたつて云つてたんだがなー』『南京は京城より随分遠いから見えないんだよきつこ』『明日先生に聞いて見様よね』

二人はガツカリしてキャラメルをしやぶり乍らポツ／＼降りて來ました。少し歩いて來ますと何處かでしく／＼泣き聲が聞えます。

『オヤ健ちゃん誰か泣いて居るよ！』『何處だらうおかしいね』『誰だらうねー』『アラあんな所でお猿の子供が泣いてゐるよ』『お猿さんどうしたの？』『勇ちゃん健ちゃんはやさしく尋ねました。』『あのねお父さんのお使ひでお酒を買ひに行く途中お金を落してしまつたの』『そう云つて又しく／＼泣き出します。』『泣かないでね僕達お父さんにおこ／＼わり云つて上げるよ、君のお家は何處なの？』

『あゝそう、あつちの方なのぢやあ一緒に行くこうね それからこれあげ様』云つてキャラメル

ルを一つ口に入れてやりました。

子猿のお家は崖の下の方の岩穴の中でした。二人入つて行くに皆眼を丸くしてぞろ／＼ついて来ました。お猿のお父さんお母さんは大變喜んで色々御馳走をしてくれました。秋の中に取つて置いた栗や柿やリンゴ等です。勇ちやん達も皆にキャラメルを分けてやりました。其の中に勇ちやんや健ちやんはすつかりお猿さん達と仲好しになつて戦争ごつこをして遊ぶ事になりました。

東の大將は勇ちやん、西の大將は健ちやんです。其の後に何十匹の子猿がそれ／＼家來に就きました。健ちやんも勇ちやんが腰の劍を抜いて『進めー』と號令をかけるに、向ふの山からミこちらの山から大勢の子猿がワーワーと攻めたてます。お猿さんも元氣を出して轉んでも泣かずに又起き上つて一生懸命に突撃します。

餘りお山が賑かなので兎さん達の熊さん達の皆自分の穴から顔を出して僕も入れて下さい僕も入れて下さいとだん／＼多くなつて来ました。勇ちやんも健ちやんもすつかり嬉しくなつて一生懸命號令をかけます。

ごちやも強いので何時迄も勝負がつきません。あつちやこつちで組み合つてゐるお猿さんも兎さんも熊さんもみんな疲れてく／＼になりましたので、勇ちやんも健ちやんは休戦の合圖をして一休みする事にしました。お山の上にベタンと坐つてハア／＼云ひ乍ら汗を拭いてゐましたら

『健ちやん向ふのお山のとつぺんお城の様に見えるねー』

突然勇ちやんが大きな聲で云ひました。

『ほんまだね勇ちやん、今度はあそこを南京城にしてみんなで攻撃仕様よ』そうかそうしようしよう、そうして日の丸の旗をする／＼と揚げるんだ』『そうだ／＼素敵だ』『オーイみんな集れー』みんなが喜び上つて列びました。

『今度はあすこの山を南京城にしてみんなで攻めるんだよ』さあ日の丸のかはりにハンケチで仕様。『長い枝をもつてくゝりつけて勇ちやんが持ちました。』みんないゝかい？ 突貫進めーつ』

號令と共に熊さん兎さんお猿さんみんな一齊に山の上目掛けて走り出しました。其の早い事早いこと。勇ちやんご健ちやんは負けそうになりましたが、一生懸命に負けずに走つて行つて山の上に登るごバンザアーイごみんな一齊に云ひました。そしてハンケチをつけた枝を高く高く上げました。丁度其のときお日様は向ひのお山にお頭を傾げてゐらつしやいましたが

『勇ちやん健ちやん南京城を占領してお目出度う。だけごもうボツ／＼おかへりしないご遅くなりますよ』ごおつしやいました。勇ちやんご健ちやんはお腹がベコ／＼だし急にお家に歸り度くなつて來ましたので旗をお山の上に突きたてるごお家の方へお山を下りて來ました。お猿さんも兎さんも熊さんも

『ねー又此の次の日曜に來て下さいね』そして又戦争ごつごしませうねー』ご云ひ乍らお山の下の方まで送つて來てくれました。勇ちやんご健ちやんは『えゝ又きつご來るよ今度は直ちやんも誠ちやんも純ちやんもみんな連れて來るよ。キャラメルも澤山持つて來てあげるね』ご云ふごもうボツ／＼灯の見え初めた町をお家の方へ元氣よく走つて行きました。

『勇ちやん健ちやんごようならー』
後からお猿さん達の聲が聞えます。

『おーいみんなさようならー』振り返るご手をふつて見送るお猿さん達が小さく見えます。お山の上にはハンカチのお旗がハタ／＼ご風にゆれてゐるのが小さく見えてゐます。

(をはり)

ハイデ (第十二回)

津田芳雄譯

ハイディはすぐにやつて來た。おばあさまが繪を見せてやるミ、目を丸くして喜び、一心に見つめてゐたが、ペーヂをめぐつて行くうちに、突然叫び聲をあげて、見る見る大粒の涙を落し、やがてはげしくしゃくり上げて來た。おばあさまがその繪を見るミ、青々とした牧場に、たくさんの小羊たちがのびのび草を食べてゐる繪であつた。まん中には一人の羊飼ひが、杖にもたれながら、この楽しさうな羊の群れをながめてゐた。太陽は地平の彼方に沈みかゝり、金いろの光りがあたり一面にさんさん照りそいでゐた。

おばあさまはやさしくハイディの手を撫でながら、

「おおよしよし、泣くんぢやありませんよ。繪を見て何か思ひ出したのですね。この繪には美しい

お話がついてゐるのですよ。晩にはそのお話をし上げてませうね。そのほかに、まだぎつさり面白いお話があるのですよ。さあ、こちらへいらつしやい、二人で少しお話をしませう、——ほら、もう泣き止みましたね」

けれどもハイディはしばらくはごうしても泣き止めることが出来なかつた。おばあさまは時々、「さあ、いゝ子だからもう泣きませんね」さながらめながらも、やさしく泣きたいだけ泣かせてやり、やつミハイディが鎮まつて來た時に云つた。

「お勉強はみんな工合ですか。おけいこは好きですか。澤山進みましたか」

「いゝえ、わたし、おけいこなんかしたつて、覺えられないつてこゝ、前からわかつてゐたのですわ」

ハイディは溜め息をついた。

「何が覺えられないのですつて?」

「讀み方ですわ。むづかしすぎるのですもの」

「それはあなたが考へたことぢやないでせう?」

誰がそんなこと云つたのです」

「ペーテルが云つたのですから、ほんたうですわ。ペーテルは自分で何度も何度もやつて見たけれど、さうしても駄目だつたのですもの」

「それではペーテルつて、よほごへんな子供なんですわね。よござんすか、ハイディ。なにもペーテルが云つたからつて、その通りに思ひ込まなくてもいいのですよ。自分でやつて見なければなりません。あなたは先生が字を教へて下さる時、一生懸命に聞いてゐなかつたのでせう」

「聞いてたつて駄目ですわ」

ハイディは諦め切つたやうに云つた。

「よくお聞きなさいよ、あなたはね、今までペーテルの云つたことばかりを信じ込んでゐるから、それで覺えられなかつたのですよ、これからは、わたしの云ふことを信じて下さい。いいですか——あなたは必ず、ちぎに讀むことが出来るやうになります。ほかの子供はみんな出来るのですよ。ペー

ーテルは、特別覺えがわるいのです。さつきあなたは羊や羊飼ひのゐる繪を見ましたね。あの御本は、あなたが字が讀めるやうになつたら、あなたにあげませう。そして、その中の山羊や羊や羊飼ひの面白いお話が、まるでひきにお話してもらつたのとおなじに、なにもかもわかるのですよ。面白いでせう? あなたはお話、すきでせう?」

ハイディは一心におばあさまのお話に聞き入つてゐたが、この時溜め息をついて叫んだ。

「ああ、今讀めたら、そんなにいいでせう」

「もう大丈夫、ぢぎ讀めるやうになりますよ、さあクララのごころへ行きませう。御本も持つていらつしやい」

二人は手をつないでクララのお部屋へ降りて行つた。

ハイディは家に歸りたくつてたまらなくなつたあの日、ロツテンマイアさんにお玄關で見付かつて、逃げて歸るなんてなんさいふ恩知らずだ、且那樣のお耳に這入らなかつたのがせめてもの幸ひだ、ミ叱られた時から考へが變つて來た。その時初めてハイディには、自分はデーテ叔母さんが云つたやうに歸りたくなればいつ歸つてもいいので

はなくて、いつまでもいつまでも、もしかしたら永久に、フラシクフルトにゐなければならぬのださいふこゝがわかつた。それからまた、自分が歸りたいなごさいふ心を起したなら、クララもクララのお父さまもおばあさまも、みんな自分を思知らずだと思ふのださいふこゝもわかつた。それで、みんなに歸りたくつても、誰にもそれを打ち明けるこゝが出来なかつた。あの大きなやさしいおばあさまにはなほさらのこゝ、そんなこゝは死んだつて云へない氣がした。小さな心一つに悲しみの重荷はたへかねて、もはや食物ものぎを通らず、ハイディは日に日に青ざめて行くのだつた。夜、一人きりになつて、あたりがしんみ静まつて来るこゝ、きまつてお日様の輝く花の咲き亂れた山の様子が目の前にまざまざ浮んで来て、いつまでも眠れなかつた。やつさうさうさうしたかき思ふこゝ、今度は夢に、夕陽に眞赤に照り映える岩や雪の野原があらはれるのだつた。そして朝目が覺めて、山の小屋に歸つて來てゐるやうな氣がして、大よろこびでお日様の光りの中へ飛び出さうとするこゝ、——ああ、そこには大きなベッドがあり、こゝは遠い遠いフラシクフルトなのだつた！ハイ

ディは枕に顔をおしあてて、誰にも聞えないやうに、長いこゝ泣いてゐるこゝがよくあつた。

ハイディのこの悲しさうな様子が、おばあさまの目に留まらない筈がなかつた。二三日も経てば又元氣になり、しほれた様子もなくなるかき様子を見てゐるが、一向よくならず。今まで泣いてゐるに違ひない顔をして降りて來る朝が、いく朝も續くので、おばあさまはある日ハイディを又自分の部屋に呼んで、抱きよせながら云つた。

「ハイディちゃん、さうしたの。わたしにお話してごらんさい。なにか心配ごこでもおありなの？」

でもハイディは、もし本當のこゝをいへば、おばあさまが思知らずだと思つて、もうこんなに親切にして下さらなくなるかき心配して、

「云へないのです」

こ答へた。

「ちや、クララになら云へますか」

「いゝえ、わたし、誰にも云へないのです」

「きつぱりさ、しかも悲しさを一ぱいにためた顔で答へる子供を見てゐるさ、おばあさまはいぢらしくてたまらなかつた。」

それではね、いいこぎを教へてあげませう。悲しいこぎがあつて、しかもそれを誰にも云へない時には、神様にお祈りして助けていただくのですよ。神様はどんな悲しいこぎでも、みんなさり除けて下さるこぎがお出来になるのですからね。わかりましたね。毎朝あなたは、神様がして下さったこぎにお禮を申し上げ、それからわるいこぎをしない様にお守り下さいまして、お祈りして下さう?」

「いえお祈りなんかしませんわ」

「まあ、お祈りも教はらないのですか。それぢや、お祈りつてさういふこぎだかも、知らないのせうね」

「もうせん、おばあさんさゝめた時、一緒にお祈りしてましたけぎ、すうつこ前だから、もう忘れてしまひましたわ」

「ああそれだからなのですよ、ハイディあなたが誰も助けてくれる人がないと思つてそんなに悲しい氣持になるのは、みんなに悲しくて心のしづむ時でも、わたし達はいつでも神様のまごころへ行つて、何もかも申し上げてお祈りするこぎが出来るのだと思つたら、氣が晴れ晴れするでせう。神

様はわたし達を救ひ、わたし達をすつかり仕合せにして下さるこぎがお出来になるのですからね」

突然ハイディはうれしさうに眼を輝かした。

「神様になら、みんなこぎでも、すつかりお話ししてもいいのですか」

「ええ、いいのですよ、ハイディ、みんなこぎでも、すつかりね」

ハイディはおばあさまにやさしく握られてゐた手をひつ込めるに、急いで云つた。

「あつちへ行つてもいいですか」

「よござんすこも」

ハイディは自分の部屋へ走つて行つて、腰掛にかけ、兩手を組んで、自分の悲しみをすつかり神様に打ち明けた。そして、さうかおぢいさんのゐる山へ歸らせて下さいと、一生懸命にお願ひした。

それから一週間ばかり経つた頃、先生が、ある注目すべき事柄が起つたので是非御隠居さまのお耳に入れたいと、申し出た。それでおばあさまは部屋に通し、挨拶がすむと云つた。

「さあおかけ下さいませ。さういふお話でせうか。なにかわるいこぎかお小言ではございませんでせうね」

「さう致しまして」

先生は滔々とはじめた。

「わたくしが全く断念し切つて居りましたことで、又事情を知るほきの者は何人さいへごも到底想像だにも及ばなかつたことが、起つたのであります。われわれのひきしく考へて居りましたことから見れば、今回のことは全く奇蹟しか考へられないのでありまして、しかもそれは現に、全く豫期に反したすばらしい現はれ方をしたのでありまして——」

「それではハイディがたうさう讀むことを覚えはじめたのでございますね」

御隠居さまは口をはさんだ。

先生は、口も利けない位びつくりして、御隠居さまの顔を見つめてゐるが、やがて又語りはじめた。

「實になんとも不思議です。今までは、いくら骨折つて説明しましても、さうしても覚えられなかつたものが、わたくしが、もう、むづかしい字の起りや意味なきは云はないことにして、ただ目の前に並べてやるさいふ方法に決めますとすぐ、急にすらすらと覚えはじめたのでございます。今で

は、まるで夜中に覺えて來るのではないかと思はれます位よく覚え、いきなり、初心者とは思へない位正確にさんさん讀み出すのでございます。全くあり得ない不思議なことでございます」

「世の中には、する分も不思議なことが起るものでございますね」

御隠居さまはにこにこしながら云つた。

「二つのことが相俟つて、よい結果になることがございますね。今度のことにしても、覚えようとする熱心さ、新しい教授法でございますね。とにかくあの子がそんなによく覚え出したことは、ほんたうに結構なことで、このさきさきも、すんずん進んで参りませう」

先生が歸るに、御隠居さまは實際にたしかめて見よう、勉強部屋へ降りて行つた。そこには、まぎれもなく、ハイディがクララのそばに坐つて、大聲で讀んできかせてゐた。ハイディ自身も、自分がこんなに讀めることにびつくりし、字さいふものが、見る間にいろいろな人間や物や面白いお話やに生まれ變つて動き出し、全く今まで知らなかつた新しい世界が自分の前に展けて來るのに、いよいよ喜びを深めてゐる様子が、ありありと見

えてゐた。

その晩ハイディが食事につくご、お皿の上に大きな美しい本がのつてゐた。不思議さうにおばあさまの方を見るご、おばあさまはやさしくうなづいて、

「さあ、もうそれはあなたの御本ですよ」
と云つた。

「まあ、わたしの？　ぢや、ずうつき持つてゐていいのですね、おうちへ歸る時でも」

ハイディはうれしくて、顔が眞赤になつた。

「よござんすきも、いつまでもあなたのですよ。あしたから讀みはじめませうね」

「でも、おうちへ歸つちやいやよ、ハイディ、いつまでもね」
クララがびつくりして口をはさんだ。

「おばあさまが歸つておしまひになつたら、あたし、さてもさびしくなつちやふんですもの」

ハイディはその夜、お部屋に歸るご、寢る前にもう一度あの繪本を出して眺め入つた。そしてその日から、美しい繪についてゐるお話を何度も何度も讀んで見るのが、何よりの楽しみになつた。晩ごはんの後でみんなが坐つてゐる時、おばあさ

まから、

「さあハイディ、みんなにお話を讀んで聞かせて頂戴」

と云はれるのが、ハイディにはさてもうれしかつた。もう何の造作もなくすらすらと讀めるし、聲を出して讀んでゐるご、その場の有様が一層はつきりご目の前に浮んで來るし、それに、おばあさまが、もつごいろいろのこごを説明したりお話したりして聞かせて下さるので。

中でもハイディの一等すきな繪は、羊の群れをつれた羊飼ひが、青々とした牧場のまん中に、杖にもたれて立つてゐる繪であつた。この繪では、この羊飼ひはお父さんの家で羊の番をしながら楽しく暮らしてゐるのだつた。けれどもその次ぎをめぐると、この人はお父さんの家を逃げ出して、遠いごころで豚の番人にまでおぢぶれてゐた。食べるものもろくになく、瘦せ衰へて蒼ざめてゐた。ここではお日様の光りさへ影うすく、なにもかもがごんよりご霧がかかつてゐるやうに見えた。でもこのお話には、もう一つ、つづきの繪がついてゐた。著物もぼろぼろに、瘦せさらばへて疲れ果てた息子が、悔い改めて歸つて來て、おつおづご進み

出るのを、年ごつたお父さんが、うれしさうに兩手を擴げながら、抱きよせようご走つて来るころである。ハイディはこのお話が大好きで、何度ひきりて聲を出して讀み、おばあさまからお話を聞かせていただいても、決して飽きるごがなかつた。まだこのほかに、いろいろのお話があつた。かうして毎日お話を讀んだり繪を見たりしてゐるうちに、知らない間に日が經つて、おばあさまのおかへりの日が、だんだん近づいて來た。

十一、よろこびごかなしみ

滞在中おばあさまは、クララのお晝寢の時は、いつもそばに坐つてねかしつけてやつた。するごロツテンマイアさんも、多分お晝寢をするのであらう、二階の自分の部屋に引き揚げる。五分も經てばクララは眠つてしまふので、さうするごおばあさまは、今度はハイディをお部屋に呼んで、お話をきかせたり、いろんな面白いごを教へて遊ばせてやるのだつた。おばあさまは美しいお人形をたくさん持つてゐて、ありごあらゆる美しい色の小ぎれを出して來ては、ハイディにお人形に著せる小さな著物や前掛けの縫ひ方を教へてやつた。又おばあさまは、ハイディにお話を讀んで聞かせて

もらふのがすきで、ハイディの方では讀めば讀むほごそのお話が面白くなるのだつた。お話の中の人たちの生活に這入り込み、その人たちご一緒になり仲よしになつてしまひ、その人たちご一緒にゐるごがますます楽しくなつて來るのだつた。それでもハイディはまだしんから樂しさうではなく、あの元氣な目の輝きは、もはや見られなかつた。

おばあさまの滞在もあご一週間ごいふある日のごき、お晝ごはんがすむご、ハイディはいつものやうにご本をかかえて、おばあさまのお部屋へ行つた。おばあさまはハイディをそばに呼び、ご本はわきへのけて、云つた。

「ねえハイディちゃん、さうしてそんなに悲しうにしてゐるのか、わたしにお話してくれませんか。まだいつかの心配ごご心にかかつてゐるのですか」

ハイディはだまつてごつくりした。

「神様にお話し申し上げましたね」

「はい」

「毎日神様に、なにもかもよくして仕合はにして下さいまして、お祈りしてゐますね」

「いいえ、お祈りはもう止しちやつたんです」

「まあ、ハイディ、そんなことを云ふもんぢやありません。さうして止したのですか」

「だつて、つまらないわ、神様はちつとも聞いて下さらないのですもの」

ハイディは苦しさに云つた。

「でも、それは當り前ですわ。フランクフルトには、こんなに澤山の人があるて、みんな毎晩一ききにお祈りするのですもの、神様だつて、そんなにみんなのお祈りをお聞きになることは出来ませんわ。だからわたしのお祈りは、きつしまだお聞きになつていらつしやらないのですわ」

「さうしてそんなことをきめてしまつたのですか」

「だつて、毎日毎日おんなじことばかりお祈りしてゐるのに、神様はちつとも叶へて下さらないのですもの」

「それは間違ひですよ、ハイディ。神様のことをそんな風に考へてはいけません。神様はわたしたちみんなのよいお父様で、わたしたち自身よりもつちよく、わたしたちのためになることを知つてゐて下さるのです。もしわたしたちのためにな

らないやうなことを願ひすれば、それは叶へて下さらないで、もつちよいことを授けて下さるのです。ただいつまでも熱心にお祈りを續けて、決して逃げ出したり、疑つたりしてはいけません。神様はあなたがお願ひしたことは、今叶へてやつてはためにならないさお考へになつたのです。でも神様は必ずあなたのお祈りはお聞きになつたのですよ。神様はあなたやわたしの様な、人間ではないのですから、そんなに大勢の人でも、一ききにお聞きになつたり御覽になつたり出来るのです。神様はきつちかう仰しやつたのでせう。『さうだ、ハイディには願ひを叶へてやるが、ほんたうに仕合せになれるやうに、もう少し時が来るまで待たせておかう。もし今すぐ叶へてやつたら、いつか後悔する時が来る。その時になつてあの子は泣いて云ふだらう。神様があの時間いて下さらなければよかつたのに。思つたほぎはよくはないのだもの。』つてね。神様はあなたのことを心配して、お祈りをつづけてゐるか、悲しいことがあれば何でもおすがりして来るか、いつでも見えてゐて下さるのに、それなのにあなたは神様から逃げ出して、お祈りも止めてしまひ、神様のことをなん

かすつかり忘れてゐるのです。神様はお祈りを止めた者には、自分でどんなに馬鹿だつたかを悟らせるために、勝手にさせてごらんになります。するまその人はきつこ困つてしまひ、『お神様、さうかお助け下さい。神様のほかには誰も助けてくれる人はありません』と叫びます。するま神様は、『何故わたしから逃げ出したのだ。逃げてゐるから助けてやりたくても助けるこまが出来なかつたではないか』と仰しやるのですよ。ハイディ、それでもあなたは、こんなあなたによいこまばかり考へてゐて下さる神様に、御心配をかけたのですか。神様にお許しをお願ひして、これからはお祈りをつづけ、何でも神様におすがりしようさは思ひませんか。神様はきつこ、なにもかもよくして仕合せにして下さいますよ。さうすれば又せんやうに、氣持が晴れ晴れして、何でもうれしくなりますよ」

ハイディはおばあさまを絶対に信用してゐた。今のお話は、一言一言胸にしみ入つた。

「わたし、今すぐに神様にあやまつて來ますわ。もう決して神様のこまを忘れたりなんかしませんわ」

「まあいゝ子、それがよござんすよ」

おばあさまはハイディがいぢらしくて、さうにかして元氣つけてやりたいと思つて、又つけ加へた。

「悲しむんぢやありませんよ。神様はきつこ今になにもかもあなたのお願ひを叶へて下さいますからね」

ハイディはお部屋に走つて歸つて、さうかわたしがいつまでも神様を忘れませんやうに、そして神様もいつまでもわたしのこまを覚えてゐて下さいませよ、一生懸命にお祈りした。

保育實習科新卒業者

東京女子高等師範學校保育實習科は昭和十四年三月、左の二十四名の新卒業者を保育界に送り出さうとしてゐます。皆それ〴〵適當な働き場所を得て斯界の爲熱心にその職に従事し度い希望に燃えてゐます。

氏名	出身校	生年月日	氏名	出身校	生年月日
淺見 あい	東京 實踐高等女學校	大正十年三月十九日	佃 悦子	廣島縣立三原高等女學校	大正十年五月十六日
石川 靖子	東京 立正高等女學校	大正十年三月一日	所 雅代	神奈川高等女學校	大正十年六月十五日
遠藤美也子	日本女子大學校附屬高等女學校	大正九年五月七日	富永 百合	東京府立高等家政女學校	大正十年五月二十九日
大橋 美代	東京 櫻蔭高等女學校	大正九年七月二十一日	中島 鈴子	千葉縣立佐原高等女學校	大正十年九月八日
川村 フミ	大連 神明高等女學校	大正十年七月二十三日	長坂 靜枝	新潟縣立佐渡高等女學校	大正十年十二月二十四日
上遠 文子	東京 青山學院高等女學部	大正十年一月二日	橋本 せい	東京府立第八高等女學校	大正九年十月二十八日
小島 七重	東京府立第五高等女學校	大正九年七月七日	久永 敏子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正九年八月十日
越山 久子	東京府立第五高等女學校	大正九年四月十七日	本多 良江	東京府立第一高等女學校	大正十年一月二十四日
齋藤 公子	宮城縣第一高等女學校	大正九年九月五日	松平 仁	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正十年二月十五日
鈴木 靜	東京府立第六高等女學校	大正十年二月七日	依田 義子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正九年十月一日
田中 光子	愛知 淑徳高等女學校	大正九年十一月二十二日	横倉 文子	栃木縣立宇都宮第一高等女學校	大正十年四月十日
高宮 愛子	千葉 町立野田高等女學校	大正九年十二月五日	吉井 正子	群馬縣立前橋高等女學校	大正十年十一月十六日

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽一
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉橋 惣三
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
 - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催
 - 一、雜誌發行(毎月一回)
 - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
 - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

一月分	金參拾五錢	特等面一頁	二等面一頁
三月分	金貳拾錢	一等面一頁	以下
半年分	金貳圓拾錢	金拾圓	金拾圓
一年分	金四圓拾錢	金拾圓	金拾圓
拾貳冊送	料共	神田區駿河臺ノ三品田	廣告社に御申込下さい

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)
 昭和十四年二月十三日印刷納本
 昭和十四年二月十五日發行
 幼兒の教育 第二十九卷 第二一號

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋 惣三
 發行所 東京市小石川區大塚町三十五
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
 印刷者 柴山 則常
 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷所 倉橋 杏林 舎

發行所 日本幼稚園協會

振替口座東京一七二六六番

注文規定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます(郵券代用の場合には前金(郵税)共)
- 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます
- 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたり
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます
- 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます

嬉しい今月の手技

その材料並ニ表簿類

◇繪馬額——厚紙製繪馬、クレオン貼紙等でお子様御自身が意匠する歓迎の手技用品。

十枚 金二十五錢

◇菱形——赤白草三色の菱餅を重ねたやうな厚紙臺紙に、縮緬摺紙で雛を折つて貼ります。

十枚 金三十錢

◇屏風形——雛祭又はお人形遊用金屏風。之に貼紙の櫻その他で美しい意匠を致します。

十枚 金三十錢

◇出席カード——武井武雄先生揮毫の愉快な美しいカード之に毎日貼紙をはつて出席と共に美しいカードになる仕組、家庭との通信欄、幼児發育標準表も添へてあります

十二枚一組 一人一ヶ年分 金十五錢

◇保育證書——良質紙に文字を墨、輪廓を金刷で優雅な色刷にした新圖案のものあり、生年月日を書き入れます御園名入は二月末日迄に御註文、無名ならば即時お間に合ひます。

一〇〇枚 園名入 金四圓五十錢

五〇枚 園名入 金三圓

無名一枚 金六錢

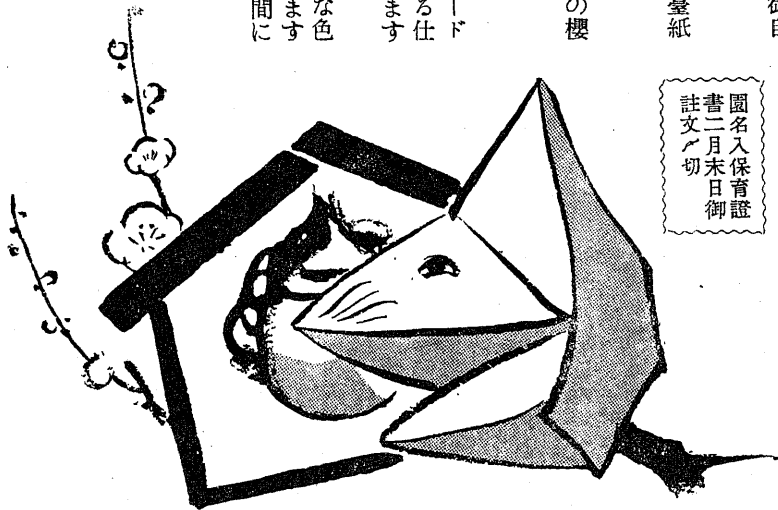
◇出席簿用紙——一〇〇枚 金一圓二十錢

◇豫定案日誌——一冊(一ヶ年分) 金一圓五十錢

◇在席簿用紙——一〇〇枚 金一圓

◇月謝袋——一〇〇枚 金一圓五十錢

園名入保育證書
二月末日御
註文ノ切



食館レベール社 株式會社

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社 本
番七二八三
番八三九一(24)話電・五町後備・區東・阪大 店 支

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
(毎月一回十五日發行)

昭和十四年二月十三日印刷納本
昭和十四年二月十五日發行

定價參拾五錢